

「……貴女の御決心はなかく健氣ですが、お若いし、御婦人の身で獨立の生活を營まうと云ふのは、事實容易ならんことです。御當人は確かりして居られても、俗世間と云ふものは五月蠅いものでしてね……御熟考なさるが肝要です。幸立派な御両親がお揃ひだから私も安心だが」

其那、世馴れた人なら誰でも云ふことを、先生からきたくはないのだ、と云ふ聲が激しく自分の内に起るのを、伸子は感じた。其なら、何と云はれたいのだらう？ 彼那佃みたいな奴は、今直ぐ、たつた今棄てて仕舞へ、と云つて欲しいのだらうか？ それとも、飛んでもない事だ。一生從順な、盲目な妻で過せと、どやしつけられでもしたいのだらうか。結局、自分の心が先生に左様しか云はせないのを知りつゝ、伸子は、何か天啓的な一言、心境に大變動を掻き起す霹靂的な一言を渴き求めた。

「こういう事は、複雑だし、一生の問題ですから、考へて損と云ふことは決してない。一朝一夕には定まらんものです。……又、では、何か私でお役に立つことでも出来ましたら、御遠慮なく仰云い。及ばず乍らお力になりませう」

紹の羽織を勢よく撥ねて俥に乗つた先生の、几帖面な、

「どうぞ御母堂にもよろしく」

と云ふ挨拶に、丁寧に頭を下げると、伸子は、急に悲しくて堪らなく成つて來た。先生の好意も、自

分のよい生活に入りたい熱望も、自分から出たすくべつたりで、取かへしつかなく滅茶にして仕舞つた氣がした。伸子は、この問題では、もう二度と先生を煩せなくなつたのを感じた。

八

七月下旬になつて、佃から、歸京する通知があつた。この夏は、伸子が勤坂に居たので、妻や子供達の留守の毎晩を、佐々は、比較的無聊を感じずに過して來た。彼は廿六日に歸るといふ佃のハガキを見ると、云つた。

「……さて、それでは私も十日ばかりKへ行つて來ようかな。お前も、すぐ赤坂へ歸らなけりやあなるまう」

伸子は、父の足許で、低い足臺に腰かけ、團扇で蚊遣の煙を、彼方に煽いだり此方へ扇かせたりし乍ら、ぼんやり答へた。

「さうね……歸らなけりやあいけないかしら」

「まだ病院へは、毎日行かなけりやあならんのかい」

「その方はもう大分いゝの、大抵なほりかけ」

「その方はいゝ、か。ぢやあ、他にどつか悪いところがありますか？ 貧乏病なら、私が癒してやらうか」

「違ふわ」

父娘は聲を揃へて笑つた。不圖、伸子は寂しさうに呟いた。

「私も、父様と一緒にいづちまはふかしら」

「Kへか？ 然し私の方はまだこれではなかくいつ行けるか分らんよ」

伸子は、赤坂へ歸るのが、どうもいやであつた。部屋々々の様子や、其裡で又繰返される日常生活を想ふと、壓せられるやうな気がした。自分を離さない鐵の機械の間へ、挟まりに戻るやうにさへ思はれた。佝の着く朝は病院へ行く日なので、伸子は赤坂に戻らないことにきめた。佝は、信州の方を廻つて十時過上野に着く豫定なのであつた。

「斯うおし、ぢやあ。鈴木がどうせ暇だから、停車場まで迎に出して、此方へ来て貰ふようにすればいゝ。夕飯を皆でたべてから、後はお前達二人の都合にすればよからう」

例刻に病院から歸ると、玄關の沓脱石に、黒革の半靴が、きつちり揃へてあつた。伸子には、この艶々した黒靴が、妙に人格を持つて居るやうに感じられた。伸子は、感情をもつて、自分の草履をその傍に脱いだ。

「おかへり遊ばせ。——佝さんがおいでよございませす」

客間へ眞直行つた。佝は其處に居ず、食事部屋の出窓に腰かけて居た。上着をぬぎ、カラアもどつた白襯衣の姿で、熾に扇風機に當つて居た。彼は伸子を見ると、組んで居た片脚を下して、つい先刻別れて歸つた人のやうに、

「たゞ今」

と云つた。

「足はどう」

頸の邊がめつきり日に焼けた彼は、顔に、改つた、探るやうな表情を浮べた。伸子も、同じ眞面目な様子で、黙つて夫に片手をさし出した。

「暑かつたでせう？ あつちは」

「あゝ、大阪は随分暑つた。宿屋はよかつたけれど」

仲子は彼の横に並んで腰かけた。佝は、頭を反らせるやうにし、しげく仲子を見守り乍ら、低い調子で訊いた。

「どうです？」

彼女の心は如何那工合かと云ふ意味なのを、仲子は直ぐ飲み込んだ。仲子は、一どきにこみ上げて来る情愛と、激しく彼を反撥するものを感じた。仲子は當惑し、首を曲げて、どちらにでもとれるやうに唇をまげた。

「——今夜一緒に歸りませう」

仲子がかく／＼しく返事をしないので、佝は彼女を抱へ込むやうにして顔を近づけ乍ら、繰返した。

「ね、歸るでせう？」

即答が出来ないので、佝子は、つけ元氣で彼の手を執つて、引立てた。

「——兎に角、まあお風呂でも浴びていらつしやいな——さつぱりなさらないでせう？」

浴衣を出して、佝を風呂場へやつた。仲子はその間に、自分も着換へをし、さつぱりと髪に刷毛までかけて来た彼と、向ひあつて、矢車草の大盛花のある客間で、冷たいものを飲んだ。仲子は、簡単に、彼の留

守中あつたことなどを話した。が、彼女は、その間ちゆう、自分が佝に對して變つたものになつたといふ意識で攻められた。元、廿日も旅行して来た彼を、自分はどんな大喜びで歓迎したとらう。彼女は、喜んで、喋つて／＼、うるさい程つきまとはずには居られなかつた。姿の見えない處から、彼女の聲をきいただけで、もう嬉しさで有頂天な仲子の心が見徹せたとらう程、單紬で、混りけなかつた。今、自分が左様でないのが、仲子自身、よくわかつて悲しい程であつた。分裂したやうで心が統一して働かず、夫の、親しい者のやうな、あかの他人のやうな顔を見ると、安心して可愛がられてよいのか、憎んでよいのか、決心のつかない氣まづさに捕はれた。佝も同様の感で、本當の調子になれないのを、仲子は心づいた。奇怪なことに、彼の顔を見ず、窓のそとの青葉でも眺め乍ら喋ると、話はなだらかにいつた。ふと眼がかち合ふと、疑ひに滿ち、相對峙して讀らな／＼二つの心が、稻妻のやうに閃き、角力はふとするのを、互に鋭く感じる。其那瞬間、言葉は空虚に感じられて耻しい。二人は自然黙りがちになつた。佝は、歎息するやうに呟いた。

「——旅行でもして来たら、君の心持もその間に變つたと、楽しみにして居たんだが……何にもならなかつた」

「ね、」

泣き出しさうになつて、伸子が云つた。

「自分だつて厭よ、此那の——本當に厭……でも、どうにも仕方がない。——貴方、御自分にわかる？ 貴方が、どんなに可愛くて、憎らしい、憎らしい人だか」

伸子は「にくらし——い」と、節のつく程力をこめて云つて、涙を落した。

三時頃、親戚に泊りがけで行つて居た祖母が歸つて來た。程なく父も歸つた。彼等はやつと救はれた。父はアイスクリームの瓶を、伸子に振つて見せた。

「ほーら！ いゝだらう？ 佃君歓迎の意を表してね」

椅子から立つて、挨拶した佃に向つて、彼は愛嬌よくつゞけた。

「ホテルでも晩食をやらうかと思つたが、考へて見ると、君はずつと洋食攻めだつたらうと思つてね。まあ今夜は一つ、胡坐でくつろいだ方が却つてよからう」

食卓で、父と佃とは種々の關西の都會について話した。祖母は、息子や孫夫婦にかこまれて、至極満悦に見えた。彼女は突然、

「貴方、御影へおいでんなつたかい？」

などと佃に訊いた。

「あすこはいゝところだない。知つてる者があつて、五十日も厄介になつて居たが、つい近くに、えー、何ちゆう名だつたか——なかに髮結の店まである温泉があつてない——省三、お前覺えないてんだか？」

「温泉と云へば……お父様、近くで何處かいゝ温泉は御承知ありませんか」

食事が終る頃に、佃が訊ねた。

「ありふれたところでは、箱根や伊豆だが」

佐々は奥羽地方の温泉を、二三擧げた。

「おでかけですか？」

佃は曖昧に答へた。

「え……考へて來たことがあるもんで……若し、貧乏書生の懐に適ふところでもありませんたら、一寸出かけようかと思ひます」

雑誌だと思つて聞いて居た伸子は、思はず注意を凝して佃を見た。佃は、どこまでも、顔さへ父の方だけに向け、父との話にして云つた。

「どうせ旅行しついでゝすから、十日ばかり行けたら行きたいと思つて來たのです」

「ほうら！ それはいゝ計畫だ。君の體にだつて有益ですよ、是非いらつしやい。温泉はいゝ」
父一流の耳學問の廣さで、温泉による天然療法の價值を論じた。

伸子は、思ひがけなさや、佝が何故、直接自分に云つて呉れないかと云ふ疑問等感じたが、次第次第に其等を忘れて、嬉しくなつて来た。伸子は生來、旅行好きであつた。結婚する前は、おとこさんと、範圍は狭いが、よく出かけた。温泉も一つ二つは知つて居た。佝と生活するやうになつてからは、彼の職業の關係と氣質から、三日四日の小旅行もしなかつた。夏、佝の生家へ行つたぎりであつた。そんなのは、多勢の家族の裡に入り、違つた周圍で、東京に居ると同じ生活の反復にすぎなかつた。本當に温泉へ行くと云ふなら、それは伸子にとつて、初めての旅行らしい旅行なのであつた。宿屋に二人ぎりで暮すこと、それも彼女の空想を輝かせた。父の云ひぐさではないが、山々や、温泉の空氣や、晴れやかな朝の目覺めが活潑にする細胞の作用で、二人の苦情が、一寸喧嘩すれば綺麗に忘れるやうな奇蹟でも起つたら、何と素晴らしいことだらう。どんなに仕合はせなことであらう！佝も同じ考へなのだらうと、伸子は驚きと悦びとを以て推定した。彼女は心を打ち開いた調子で、アイスクリームをたべて居る夫に云つた。

「——本當なの？ そのお話」

「行きますか？」

「えゝ行つてよ！」

「ちやあ、早速電報で問ひ合はせて見ませう」

佝は、事務的な口調できゝかへした。

「然し——もう行つていゝんですか、病院はやめていゝかどうか」

伸子は、それで中止されては大變といふ勢で遮つた。

「勿論大丈夫よ。でも、明日念のためによく伺つて来るわ。——大丈夫に定つて居るから行きますよ、ね、やめないでね」

九

正面には清澄な空氣を擧いで、噴火山が濃い小豆色に聳え立つて居た。頂の煙が、搖がす立ち昇つ

て居る。煙草畑、矮樹林、さうかと思ふと、又煙草畑。勾配が急になるにつれ、左右に青木ヶ原の爽快な地平線の眺めが、数十里の彼方まで擴がった。伸子等の自動車は、そこを底力の籠つた爆音をたて乍ら、ひた押しに登つて行く。午前五時の露つばい空気を裂いて疾走するので、太陽は上つて居るが、伸子の頬や唇がひやく／＼で、強ばるやうであつた。

橋を一つ渡る。くの字形に崖に挟まれた急坂を登り切ると、行手に古風な温泉町が現れた。坂沿ひの兩側に、宿屋と土産物を賣る店とが軒を連ねて居た。道の真中に白く湯氣の立つ溝があり、高く湯の香が四邊に漂つて居た。自動車は軒下をすれ／＼に通る過ぎる、どの宿屋でも、もう寝て居る客など一人も無く、活氣づいて居た。からりと明け放した手摺に浴衣を干して、部屋には一杯朝日がさし込んで居るところ。着いたばかりの客が洋傘を額の下にかつて、彼等の自動車を目送する様子。土産物屋の店頭、粗末な赤や緑で塗つた剝物が並んで居る。それも田舎つぽく、陽氣な湯町の朝景色であつた。伸子は氣のりがして、部屋の無いことも大して苦に仕なかつた。其年は、夏休みちゆう特別なこみかたで、伸子等が着いた時でさへ、吉田屋の店先には、二十人ばかり溢れた新來者が居る有様であつた。彼等は一晩、吉田屋の番頭の家で過ごした。吉田屋の筋向うにある土産物屋の一つで、表で商ひをし、二階をさうやつて夏場の溢れ客のために使つて居た。岡持を下げた吉田屋の若い者が、

朱塗の膳など運ぶのが見えた。彼女等は、そこにさへ場所がなく、店の直ぐ裏の座敷に置かれた。納戸の暗いところに、桃色の兵児帯が見えた。夜、こちらの電燈を消したら、店の灯で、剝物の茄子の影が障子に映つた。

やつと明いた部屋も、本来は小林區の役宅の一部であつた。

「でもいゝことよ、却つて静かだわ、山家住居で……」

八疊と六疊とある、八疊の方が彼等の室になつた。六疊は見晴しがある代り、直ぐ堤下が道路で、絶えず通る浴客から部屋の内が見透しであつた。八疊の方は、細長い空地越しに役宅の主屋と向ひ合ひ、左手は熊笹の茂つた断崖であつた。そこに、田舎の温泉場らしく湯の算が通つて居た。熊笹の間には、龍膽の花が山氣に濡れ乍ら咲いて居た。

高原的な緑木のさわめき、輕快な空氣。自動車で来る路々も、伸子は殆ど官能的な解放を味つた。

自然には、人間を元氣づける元素が、特別多いやうであつた。伸子は、ひとりでに活潑になりたい欲望を強く感じた。彼女は、自分で注意深く、その快活さの量が増すのを、計つて居るやうなところがあつた。段々、段々、この元氣が溢れたら、夫と自分との間に横る種々な塵が、或は流されて仕舞ふかもしれない。……もう少し……もう少し……彼女が何に、

「ね、其那詰らなさうな顔してないで、これでもしませう、ね」とトランプを出す時、又は、

「ちよつと！ こんな花があつてよ」

と呼びかける時、伸子は大抵、内心で、その快活メートルの下降を豫感して居る時であつた。けれども、佯は、伸子の其那誘ひには、温泉場へ來ても家に居る時同様、なか／＼のつて來なかつた。爪を剪り乍ら、伸子の云つたことゝは違ふ返答、

「——到頭今年の夏は何も出來なかつたなあ」などと呟いた。

「何か豫定がおりんなつたの？」

「自分の時間と云ふものは夏休みしかないんだから、勿論仕たい事はいくらもありましたよ」散歩して、見晴し臺へ行つて見ると、射的場の前に、若者が群がつて笑ひ興じて居た。自然石の涼臺に、晴やかな様子で、一組の夫婦が前の廣場で追つかけて居る子供を見て居る。ぞろ／＼、伸子等の前後を通りぬけて、芝生の間の徑を、遠い遊園地の方へ行く人々。皆が心輕げで、自然の潤さ、そこに小さい人間の雑踏を、氣易く楽しんで居るやうに見えた。伸子も、さういふ人々に混つて

歩いて居ると、心が、單純に悦ばう、悦ばうと弾むのを感じた。そして實際、彼女は射的場でキルク玉を打ち放つ程罪ない心持にも成るのであつたが、それはやはり一時のことにすぎなかつた。

部屋にかへつて夫とさし向ひになると、氣重さが彼女に迫つて來た。多勢の人中に居る方が、凌ぎよゝ。戸外の明るさの中にあつても、彼等は互に今溶け合つたい、心持で居るかと思ふと、忽ち離れ離れに成つた互を感じ、寂しい切ない思ひを感じ合つた。何とも云へない焦々しさが、そのやうなとき、伸子を苦しめた。彼女は喋いだり、佯に意地わるい小言を云つたりした。

或朝、風呂から出て來ると、佯が縁側に出て庭に立つて居る女中と話して居た。

「ちや日歸り出来るね」

「え、悠／＼でございますよ、少し早めにお出かけなれば」

「——どう云ふ風に行くのかね、こゝからだ——殺生石の横から上るのかしら」

「左様です。彼處に一寸急な處がござりますが、直ぐ本道へ出ます——大勢さんおいで、すから、そこまで行らつしやれば、自然と頂上までお登れなさいますですよ」

「ふんふん」

「折角来たんだから那須へ登りたいと思つて」

朝飯を食べ乍ら伸子は云つた。

「君はどうせ駄目でせう——待つて居てくれますか」

「さうね——待つてたつていゝけれど……」

一日ぼつねんとして居ることを思ふと、氣が進まなかつた。

「何里あるの——行けたら私も行きたいわ」

「上下三里ばかりださうだが、すつと登りつゞけだから——どうかな——」

「行くわ、ぢやあ。ぼつつりこゝに居るより行つた方が増し」

伸子は臆を下げに來た女中に草履と結びつけの紐を頼んだ。

起きた時分には霧があつたが、八時過ぎると素晴らしい天氣になつた。樹間の山道から本道へ出た

登山路はすつかり開けて居た。女連れや子供づれの湯治客が、暢氣に熊笹の間を縫つて行くばかりで

はない。二間半程の道の一方によせて、トロツコの軌道が敷けて居た。

「まあ、すつと上まであるのね、何が通るんでせう」

十五ばかりの少年をつれ、中齒を穿いた男が、伸子等の横を歩いて居たが、

「よく開けたもんですなあ。このトロツコで硫黄を麓の工場迄降すんです——餘程の産額になるらしいわ」

と、それをきゝつけて云つた。

登るにつれて、背の高い樹木が減つた。日光が暑くなつたので、伸子は洋傘をさした。笹の繁つた

山腹、キラ／＼碧い夏空の下で、たつた一點赤い自分の洋傘の色は、どんなに活々美しく見えるだら

う。伸子は、子供らしい物珍らしさで亢奮した。風景も、湯本までの自働車から眺めたより、此邊は

すつと雄大であつた。紆曲の緩やかな笹山が、目を遮る何ものもなく、波うちつゞく。遙か遙か

下界に、八月の熱氣でぼ／＼と、水色がかつた眞珠色に霞んだ地平が見晴せた。道の工合で前に行く

人の姿は見えず、時々話し聲だけ聞える。その人聲が、山路の明るい静寂の深さを感じさせた。

彼等は丸といふ、山の裾の温泉で晝飯を食べた。どん／＼、川になつて流れる野天の温泉の巖の

間に、大勢の男女が裸で入つて居た。繪のやうな光景であつた。

そこから四邊の景色が一變し、火山道になつた。笹の處々に、眞白く曝された枯木の骨が無残に中

折したまゝ、ぎざ／＼突立つて居る。路端の僅かな平地に、硫黄採取人夫の堀立小舎があつたりして、

いかにも工業山の雰圍氣であつた。伸子は丸を出る時、娘づれの親切な紳士に貰つた杖を突いて、

手間どつて登つた。やつと頂上が見えた。その前にもう一つ急な攀上りがある。伸子は汗だくだくになつて、その手前で立ち止つた。

「一寸休ませて！」

仰も、大丸に着く前から上着を脱いでしまつて居た。それでもびつしより汗が滲んだ。

「日かげがないからひどいのよ、あ、涼しい風！」

いゝ心持で風に當つて居るうちに、伸子は段々、噴火の音が氣になり出した。硫黄運びのトロツコも、頂上近くでは山腹の彼方側を下ると見え、登山道の上にも下にも、人間の姿がなかつた。焼土ばかりのところを、幾々唯一筋の細道が三斗小舎の方角に消えて居る淋しい行手。下の遠い山並。その等は凝つと午後二時の太陽に照りつけられて居る。石ころの轉る音もしないところへ、巨大な轟を吹くやうな、噴火口の唸りだけが聽える。音は強くも弱くもならず、のそくして居ると、ハタとその唸りが止んで、山ぢゆう爆發でもしさうな恐怖を伸子に與へた。

「行きませうぢやあないの！」

「うむ」

道の峻しき、自然から受ける威壓、二人は黙つて、一氣に坂を踏えた。

「やつと来た！ よく我慢しましたね、私は、きつと中途で引かへすことに成るんだらうと覺悟して居た」

「登りかければどうにかして登るわ」

噴火口は、頂上の横穴のやうな處にあつた。灼熱した硫黄が、燃え立つラベとなつてそこから流れ出して居る。その焰色の周圍に、冷却した部分が、世にも鮮やかな黄色の鐘乳石のやうに凝固して居る。限ない盛夏の碧空、その硫黄の色、強烈な配色であつた。硫黄採りの男が數十人、或不安に黙り込ませられたやうに、眞面目に働いて居るのが、荒涼として長い山の斜面に見えた。

往きの半分の時間もかゝらず、彼等は峠の小休茶屋まで還つた。

「あら、店をしまつたのね、休みたかつたのに」

「天氣がわるくなつたからでせう、まあ、すつと歸らう」

霧が深くこめて来て、自分達が降りて来たばかりの山嶺を振返つても、もう見えなくなつた。

「下は雨でせうか」

「さあ……風があるから大丈夫だと思ふが」

下りの勢で、歩調を揃へとん／＼下りて来るうちに、ポツリと顔に當るものがあつた。

「……降り出してよ」

「夕立でせう」

ポツリ、ポツリ、段々雨粒が繁くなつて来た。伸子は赤い傘を擴げた。

高い山を覆ふ雨は一町位で、上と下との雨量がまるで違つたり、半分ばかり下りて来ると、もう其邊は大雨であつた。緒士道が泥濘になつて居た。雷が鳴り、笹の中から亡靈的に突立つて居る白い死木に稻妻がひろく閃く。伸子はぞつとした。

「この方が早く歩いていゝ」

伸子は伸子の腕を自分の腕にかけさせた。

「もう直きだから、大丸で雨やどりして行きませうね」

伸子の紅い日傘など、何の役にも立たなかつた。透綾の着物が肌まで濡れ徹つた。水を吸ひ込んだ草履が重くふやけ、ビシヤツ、ビシヤツと、伸子の足の下で泥を跳ね上げた。

「やまなくてよ、これは——雲がどつこも切れて居ないんですもの——本當に、一寸大丸によつて行きませう」

「……」

伸子は歩調を速めた。伸子は小走りになつて彼に調子を合はせ乍ら、又云つた。

「雷が、私閉口よ、全く。——おいや？ よるの」

「大丈夫ですよ、雷は遠いもの」

「……でも、私本當に一寸やすみたいのよ、氣持が悪いから」

大丸へ曲る林の横に出た。伸子は、仰の腕を引いて立ち止つた。

「どうしてもいや？」

「真直行きませう、ね、休んだつてつまらない」

「混んで居るから？」

伸子は曖昧に鼻を鳴らした。

「兎に角——さ、歩きませう」

此那に儘まで濡れ透つたのに、何故大丸で雨宿り位してはいけないのか、伸子に夫の心持が分らなかつた。彼女は、わけも云はず無理にさうされるので、猶不満であつた。金の持ち合はせがないのではなかつた。……

大丸を過ぎると、先が白く重吹いて見えない程の大雷雨であつた。山ぢゆうの笹を横なぐりにして

どつと吹き降るので、傘がバラシウトのやうに風を孕んで、伸子を體ごと吊り上げさうにした。或角でひよいと石に爪先を取られた機勢に、伸子は惰力で、はつと思ふ間に兩膝ついて轉んだ。腕をつないで居た佃も、釣られて中心を失つた。立ち直らうとして、彼は伸子の背中に片足突きかけて飛び越し、辛うじて膝をつかずにすんだ。

伸子は一里半の山路をすぶ濡れで下つた。

山には秋が早く来て、夏の終りらしい豪雨がその日から屢々あつた。

「ほう！ こりやあしどい！」

合羽をかぶつて、番頭が飛び込んで来た。

「……どうも近年にない荒れでございますね、全く番頭泣かせです」

下の川が水嵩を増し、凄じい響で流れた。晝頃から雨を衝いて、頻りに人聲が右往左往した。縁側の雨戸のすきから覗くと、蓑をつけた人足が潮の勢で上から流れて来る石をよけに働いて居た。大雨に暗く降りこめられるのも、伸子にとつては變つた趣であつた。雨戸一重裏の崖で、熊笹に雨の飛沫く音がした。量の殖えた温泉がごくく咽んで笈を走る音。雨の中に、湯の香がいつもより

強く漂つた。子供の時分、夏の嵐を踏躰に乗つて、無變惑から熱心に眺めた伸子は、懐しくそんなことを思ひ出したりした。

佃はそのやうな一日、物慣げに財布を出して、机のところで錢勘定をしたり、晝寝をしたりした。

伸子は、

「何かして遊びませうよ」

と夫を促した。

「折角楽しみに来たんだから、まあ出来るだけ愉快にした方がいゝわ」

すると、佃は咎めるやうな眼付で伸子を眺め、きゝかへした。

「――たゞ楽しむ爲にだけ、来たんですか」

思はず眼が喰ひ合つた。伸子は鈍い恐怖めいたものを心臓に感じた。

「どうして？――違ふの？」

「私は、あなたの足の爲にいゝだらうと思つたから来たんです」

伸子は、自分達の間に危いながら燃えて居た蠟燭の灯が、フツト吹き消されたやうな寂しい心持がした。

「それで、こなひだも、大丸へよつたりしちやいけなかつたの？」

伸は、然し黙り込んで、其には答へなかつた。

そのやうな感情の齟齬が、歸るまで、遂に彼等の間から消えなかつた。七日居て、彼等は謂はど喧嘩別れのやうに、伸は東京へ、伸子はKへと、別々に立つた。

伸の黒い制服の肩を窓から見せ、汽車が動いた。自分の乗つて居る汽車も動いて、互に反對の方へ行く。——伸子は、再び歸ることないところへ向つて動き出したやうな心持であつた。

「広い蚊帳の中で、寝ながら伸子は、ぼつり、ぼつり、母と話して居た。四邊には、涼しい田舎の夏の闇があつた。」

「——だからこれで、夫婦なんていふものは難しいものさね………」

「悠くりした多計代の聲が、高い天井の方からのやうに響いた。性質が違ひすぎてもいけないし、さりとて、勝氣同志では丸く行かないのはあたりまへだし——。お前なんぞは、傍で見えて居ると、どうしても自分より弱い、卑屈なやうな處のある者を選ぶ傾きだね」

伸子は枕の上で仰向き、眼をあいたま、組合はせた手を頭の下にやつて居た。

「——さうかしら——私、自分が弱いと思つてよ、例へば佃とのことにしろね、私がつと圖太く腹を据ゑ切つて、あのひとをコントロウル出来れば、状態は變るのよ。——あのひとは芯の極く強い——」

何か、兎に角私の手には負へないところがあるわ」

「そりや世間を見て居るもの、……お前をどう動かす位のことは、ちやんと心得て居るさ」

「私には、底の知れて居る體裁のいゝものを、表面でやりとりして置いて、その間に、ぐんぐん此方をのして行くと云ふやうなことが出来ないでね。眞正面でない心の關係は、私に持ち切れない。其なら、一刀兩斷な處置をするかといへば、又さうも出来ず……勝氣などこぢやないわ」

「人によつて違ふもんだね」

多計代は、俄に力をこめた聲を出した。

「私なんかだつたら、一思ひに、思ひ切つちやふね、自分を眞から愛してくれもしないやうな者に引づられて行くなんて、考へただけだつて堪らないことだ」

仲子には、佝に、自分に對する微塵の愛もないとは思へなかつた。彼としての關心は、——少くとも男が自分の妻になつて居る女に對して抱くだけの心持は仲子に對してもあつた。——それが判つて居て、自分がその人情に安じられないから、仲子は悲しく苦しいのであつた。

「だつて——其ぢやあ自分の心持はどうするの、相手が本當に愛さない、其なら、つて自分の愛が急に消え切る？ さう都合よく片づかないから、切ない思ひをするんぢやあないの。つまり云へば誰だ

つて對手の愛を苦しむんぢやあなくて、自分の心にある愛を苦しむ方が多いんだわ」

「ぢやあお前——まだ佝を愛して居るの？」

隙間風のやうな寂しさが仲子の心を通つた。世間の、一度結婚してそれが破れ、親の家に戻つた娘が一人残さず經驗するだらう憂愁の源が、母親の單純な質問の中にあつた。

仲子は、程經つてから云つた。

「私にはね、どうしても、普通の結婚生活がやつて行けないからつて、残つて居る好意や愛まで打殺さなければならぬ譯は決してない氣がするの。何もこれまでの夫婦がさうだつたからつて、眞似をするには及ばないんですものね、組立てるにだつて、解ぐすにだつて、めいぐのやり方つてもものがあつていゝわ」

「佝といふ人に其那ことは解らないよ、——初つからお前——目的が違ふんだもの」

「それなら其でいゝのよ、私と生活して何かいゝことがあつたんなら、私それで満足よ。だから、別にならばどう斯うと自棄みたいなことを云つてさへ呉れなければね。——私自棄ほど嫌ひなものないわ、世の中に自分が其那外道人間を一人作るのかと思ふと、ぞつとして、勇氣も何も失つて仕舞ふのよ」

「……………」

微に、多計代の起上る氣勢が闇の中でした。伸子は、頭を母の方に向けた。

「なんなの」

「いゝえね、少し涼しすぎるやうだから羽根布団をかけようかと思つて——お前はどうか？ それでいゝか？」

伸子は、麻の小夜着をかけた胸をたゞいた。

「大丈夫よ」

多計代は、

「田舎は此だけ違ふんだねえ」

年よりらしく眩き乍ら、又寝た様子だつたが、いきなり思ひ出したやうに聲高く云つた。

「なあとどつち道心配することありやしないよ」

「何が？」

「あのひとの云ふことをさ」

「どういふ意味で？」

「だつて判つて居るぢやあないか。死になんぞする人ではありませんよ。其那若々しい馬鹿ではないよ」

「——さう高は括れないわ」

「ぢやあ見て居て御覽！」

多計代は、嬉しさうな、挑むやうな聲を出した。

「若し本當に其那人だつたら私はあのひとを見あげるよ。どんなにでもして私の不明を謝さう」

——伸子は、いやな心持になつて黙つた。つい本氣になつて種々話した自分の淺墓さが不快になつた。一人の人間の、生き死にを、このやうにして話すのは恐ろしいことだ。伸子は、小夜着を頸の下まで引あげて寝がへりを打つた。多計代は、伸子が眠たくなつたのだと思つたらしく、

「——そろく寝ようかね」

と欠伸まじりに呟いた。

「空気がいゝ故と見えて、こつちへ來たら不眠なんぞすつかり忘れたやうになつて仕舞つたよ」

「……………」

「ぢやあ、おやすみ」

「——おやすみなさい」

十分もしないうちに、母の苦のなささうな平らかな寢息が聞え始めた。多計代は、伸子が久しぶりで自分と数日暮して居ることで満足しきつて居るやうに見えた。伸子がどんな心持で来て居やうとも。伸子は、目をあいたなり、たゞ一つの細い寢息を凝つと聴いて居た。その音に引かれ、洪水のやうな周囲の闇や先刻からの澁い氣持が、規則正しくさしたり退いたりするやうだ。彼女は、そつと寢床を出た。蚊帳の裾が、涼しい簾の敷物の上に落ちて重い音を立てた。

廊下を行くと、燐光のやうな月の光が、閉め連ねた障子の面に照つて居た。伸子は、雨戸に切嵌めた硝子窓に、顔を押しつけて外を見た。庭ちゆうに月がさして居る。その中を歩いたら髪に燦く液體がねばりつきもしさうな光波につままれ、圓い躑躅や檜葉がくつきりと黒い影をしたがへて鎖りかへつて居る。樹や芝生が夢幻的に、生あるものゝやうに思へた。この月夜には、人間の靈魂も遠くたやすく傳はりさうだ。何百里も離れたところで、妻である女とその母とが、あんな會話をした。それがこの夜、若し側の魂へ響いて行つたら、彼はどんな心地に打たれるであらう。

伸子はむきになつて、二三度、力一杯月光の漲る硝子の面をこすつた。雨戸を抜け、月光に浸つた夜氣の中へ泛かみ出して行く魂の波動を、いそいでごちやませにして、遮り止めようとするやうに。

十月になつて、伸子は東京へ歸つた。一月半ばかり前、佃と那須へ行くに同じ線を北に向つた時分と、風景はすつかり違つた。一面秋であつた。

上野の構内に列車が入ると、赤帽を呼ぶ爲に、伸子は早くから窓をあけ、プラツトフォームを見て居た。發車する汽車が向ふ側に入つて居て、その方の見送りや貨物の積込みやで雑踏する中に、數人の出迎へ人が、今停車しようとする此方の客車一つ一つに注目して行んで居た。其群の中に、伸子は思ひがけない横顔を認めた氣がした。佃そつくりの、外套を着て山高をかぶつた男が、人待ち顔に立つて居る。彼女の着く時間は手紙で知らしてあつた。伸子は、體ちゆう、ぼつと熱くなつた程感情を動かされた。彼が来て呉れたのだらうか？ 彼だらうか？ 彼が来て呉れるとは思ひがけない！ 伸子

子は一層窓からのり出した。彼女は、その仰らしい横顔に向つて、合圖のつもりで手を振つた。が、伸子の目的の人の注意は引かず、赤帽が、まだ情力で二つて居る列車の窓下に駈けつけて来た。

「何箇ですか？ これだけでですか？」

伸子は、聲の届かない處に佇んで居る、その人影を見失ふまいと其方に氣をとられ乍ら、トランクを渡した。

「何番？」

「二十八番」

足早に、伸子は其人が立つて居る柱の處まで進んだ。愈々夫かと思つた時、ひどく動悸がし、口をしやんと結んで居られない程であつた。禮の言葉をもどかしく制し、一直線に三尺ばかりの距離まで来て、改めて其の顔を見なほすと彼女は、變な、泣笑ひのやうな皺を口に漂はし、ふいと傍に逸れた。

佃ではなかつた。――

改札口まで、今度は悠くりコンクリートの上を歩き乍ら、伸子は、彼那に迎へられて歸る人は、何といふ幸福だらうと泌々思つた。考へて見れば、夫が迎へに出て居て呉れようなどと空想したのが、抑々間違ひであつた。彼は、伸子が東京から何處へか行つたり歸つたりする時、決してステイション

までも、来たことはない人であつた。其上、歡んで迎へて呉れと要求もされない心持であつた。去年の初夏、同じ田舎から、同じやうにして歸つて来た。その時と感情は全然違つて居た。それは、伸子によくわかつて居た。今度、伸子が歸つて来たのは、どうして夫婦の關係を立てなほさうかと思ふより、その關係を、最も合理的に更へるには、何うしたらよからうといふ考へに押されてであつた。互の運命に對する恐れも深くあつた。特に佃の側に對して。如何那に救ひがたいものとなつては居ても、伸子は、夫との絆にまだ愛があつた。他人にその始末をつけて貰はふとは、絶対に思へなかつた。せめて自分達の意志と、後に悔ない必然とで、破れるものなら破りたい。さういふ心持ちなのであつた。其那筈はないと心得て居ながら、伸子の棍棒があがる時、伸子はもう一遍、水のまかれた日光のささない三和土の上で、小荷物運搬の手押車をよけよけかたまつて居る疎な群集の中を物色した。佃をつくりの横顔を持つた男は、もう其邊に見えなかつた。

伸子が歸つて間もなく、二日休みの日があつた。

伸子は、縁側に坐布団を持ち出して居た。秋晴れであつた。躑躅の横に、先住の人の置いて行つた薔薇が、小さい鮭肉色の花を、二輪つけて居た。薔薇の木の後は古い竹垣で、その裏に、更に古びた隣家の羽目が高く見えた。羽目は黒いが、永年の風雨に荒廢し、黒さも薄墨色にぼんやりしたところ

へ、緑つぼく細かい微が、蛾の翅の粉を撒いたやうに滲みついて居た。その背景の地色の前に、黄がかつた二輪の薔薇は、鮮やかに美しく見えた。艶ある濃い臙脂の織い枝の線、夜の霧に蝕まれ始めた葉の色。荒廢した黒い羽目に、此より優れた飾りはなく、秋の薔薇の花にとつても此調和に優る周囲は無いと思はれた。

伸子は、快感をもつて一隅の詩情を味つた。世の中の美しい人達は、何故このやうな裾模様を着ようと、思ひつかないのであらう。立派な衣裳と云ふのは、このやうに、計らず印象にのこされる自然の完成した美を、とり入れたものではあるまいか。

すると、其時あちら向きになつて、一本の松の樹の下を掃いて居た佃が、伸子の方を顧た。

「どうです？ 面白い？」

「これ」

伸子は、薔薇から目を離し、先刻から片手に持つたなりで居た本をあげた。

「——冒險物語よ………春浪みたいな書き出しだわ」

「でも、古い人でせう、その著者は……」

「古いことは古いらしいわね——」

伸子は、緒言のところを讀した。

「四世紀頃ですつて」

「ふうむ………」

佃は、それはそれで打ち切り、十坪ばかりの庭の庭石の眞央に立つて、彼方此方を見廻した。彼は何か見つけ、不興げな表情でつくばひの傍へ行つた。

「仕様がないな——又此那足跡をつけて居る」

彼は、スリツバの古いのを穿いた片足で、べたべたと一箇所を踏みつけた。

「とよ！ とよ！」

木戸から、とよが首を延して、

「お呼びになりましたか」

と云つた。

「——お前今朝、下駄でこゝを踏んだかい？」

「………」

とよは、縁側に居る伸子の方に流眄をし、困却したやうに、佃の踏んで居る場所へ目を落した。

「滅茶々々に歩かないで呉れ、私ばかり、一生懸命に掃除して居るんじゃないか」

「はい」

「花鋏をもつて来て呉れ」

鋏を受取り乍らも、佃は念を入れて、足跡のことを繰返した。伸子は、傍に居て、妙な極り悪さを感じた。自分達夫婦の、さつぱりしないいきさつの飛沫を、女中が受けてゐるやうに思へた。

花鋏で、佃は、折れて枯れたまゝ下つて居た松の小枝を剪つてから、薔薇の木のところへ来た。八つ手の下を潜つて、横手から、彼は、咲かずに萎れた蕾を挟み始めた。伸子は黙つて見て居た。佃は、段々鋏を入れ、伸子が、さつきから心をひかれて眺めて居た、二輪の、半開の花をも剪らうとした。

「あ、それはやめて下さらない。奇麗だから」

「かうやつて置いても直き駄目になりますよ。剪つてさしたらいゝでせう」

「でも、剪つちや、まはりの様子が違つて仕舞ふから——いゝんでせう？ さうして置いたつて」

佃は、捕へたその枝を離さず、云つた。

「永く花を置くと幹が痛むから剪らうと思ふだけです」

伸子は、言葉に出すと氣障なやうで、その二輪の黄がかつた蚌肉色の薔薇が、その背景あつてこそ

どのやうに風情に富むで居るか説明出来なかつた。

「本當に、さうやつて咲いて居るといゝのに！」

「ぢやあ止めませう——do as you please」

ふてた顔で再び八つ手の下を潜つて出て來乍ら呟いた。

「——こんな花！ もつと——綺麗だつた時には見る人もなかつた」

この木一杯に薔薇が花をつけて居た頃、三十日も前になるだらう、彼女は田舎に居て、夜毎に耳だつ廣い蟲の音と、黄色くなつて來る庭の芝を見て暮して居た。その間の氣持や、今自分達二人が、透明に秋陽のさす庭で、薔薇を剪る剪らぬと云ひ纏れて居る心持。烈しく愛し合つて居た筈の二つの心が聯絡を失ひ、たゞ、離れ切れない消極の力だけに索かれて、互に牽きつ牽かれつ居る状態が、切なく伸子に迫つた。これから何年か経つた後の或秋晴の日、偶然今日の些細なこの情景が、記憶の底から浮び上ることがあつたら、縁側にかうやつて坐つて居た自分、庭に居る佃の姿、美しかつた二輪の薔薇は、何を自分に語るだらう。

翌朝、黎明に、伸子は硝子戸から庭をすかして見た。薔薇は露に濡れ、うなだれながら、色鮮やかに、昨日と變らず咲いて居る。その無心な鮮さ、淨らかさが、異様に伸子の心を傷ませた。彼女は眼

を逸すやうにして通り過ぎた。

三

夜の八時。スマイルノフが、ハフイズの詩を音讀して居た。後について、何が、抑揚を注意し乍ら、一節づつ讀んで行く。——喉音の多い、單調な二つの男の聲は、四邊の空氣を重く感じさせた。スマイルノフが低い聲で何か云ふのに對して、何が、せはしなく、重ねて、

「Yes, Yes,」

と答へる聲も聞えた。——總てそれ等は惱しい。仲子は、部屋の中を、彼方此方動き出した。

歸つていくらも經つて居ないのに、仲子は、數日來、一種情熱の足りない自己嫌惡に陥つて居た。今度歸つて、仲子は、夫がもう自分をなみの女として扱へなくなつたのを知つた。持てあまし、要點が捕へられず、恐れるべきなのか、儼れむべきなのか。兎に角觸らぬ神に祟りなし。さうきめた風

に感じられた。田舎に居た間のことについては、仲子の方のことも訊かないと同時に、何は、自分の方の生活についても一切話さなかつた。

「歸つてさへ來れば、いつでもウエルカム・ホームですよ。ベイビ」

然し、本當の嬰兒のやうに、無垢ではない。仲子は女で、彼の妻であつた。彼等の間では、夫婦關係も、自然さを失つて居た。家族主義的な希望もなければ、原始的な慾望の燃え上がりから生ずる、淨らかな力も缺けた。何の、何だか恩惠的な、或時にはさういふ行爲さへ、仲子の爲と云ひたげな感情を感じるのに、仲子にとつて苦しく、屈辱であつた。彼女は、ひとりでに満ち溢れて來る自分の、若い、濺とした愛撫されたい慾望さへ、其那時は憎く、口惜しく、悲しかつた。二度と還らない若さにまで、不合理な耻辱を感じさせる夫を恨んで泣いた。二人の關係が、悪いのだ、間違つてしまつて居るのだ。仲子には、さうとしか思へなかつた。一人々々離れて見れば、大して悪い者でもなく、慘酷なものでもない人間同志も、或關係の下に置かれると、別人になる。——何より其處を正すべきなのは彼女自身知り過ぎてゐた。

田舎から歸る決心をした時、仲子は、自分が何のことを考へてゐると思つて居た。最上の解決を得たい。徒に生活を破りたくない、よい動機で、歸るやうに思つた。ところが、自重するばかりではない

らしい不決断で、毎日を消して居る自分を顧ると、伸子はかうやつて歩き廻はらずに居られなくなるのだ。

佷は、彼一流の忍耐と致さから、形式上、昨日のことは昨日のことと、しようとして居るのは明かであつた。これで行くなら、まあそれでよい、さう云ふ考へ。自分は自分で、知らず／＼そこにつけ込んで居るのではないかといふ氣がして来た。彼を攻めつゝ、結局、勇氣の足りない自分を預けて居るのではないか。

伸子は、よくあるやうに、他に新たな戀人が出来たので、やつと境遇を更へた、然し、或男の妻である點では以前の反覆に過ぎない、男から男へ移つたといふだけのやうな生活法には、疑ひがあつた。彼女は、佷と誰かを比較して、結婚生活がいやといふのではなかつた。相互の性格によつて種々生じる不都合と、並に、結婚生活のしきたりとも云ふか、一般男女間に通用して居る生活内容の感じ方、生かし方に、納得ゆかぬ數々を見出して居るのであつた。佷は、伸子にとつて最初の夫であつた。そして、恐らく最後の夫となるらしかつた。伸子自身、もつと違つた女に生れ更るか、或は一般の性生活の常識が、或點變化でもして、もつと無理なく、ならなければ。つまり、伸子にとつて、佷と夫婦生活がやつて行けないのは、たゞ對手が佷だから云ふだけの理由ではないのであつた。面倒に云へ

ば、佷といふ男、自分と彼との結合生活に導き入れられた、彼女に辛抱ならぬ中流的な精神や感情の不活潑さ、貧弱な偽善、結局は恩給證と引かへになるのが樂しむらしい所謂仕事の態度、それ等と逆もうまく調子を合はせては行けない自分を見出したといふことになるのであつた。其故、伸子は佷に對して、混りけのない一面の氣の毒さがあつた。彼だけこの世でさういふ生活を欲し、無批判なのではないから。彼女は、自分の欲するそのものが彼にもいると信じて、彼に結びついた、がむしやらかな熱情を詫びることは出来た。然し、一人の人として伸子は疚しさをなく、自分の主張を實行する心のよりどころがあるのであつた。

其だのに何故ぐづ／＼せずには居られないのだらう？ 愛の故か？ たゞ數年間夫婦として暮した習慣によつてであらうか。又、人間は悲しい生き物で、薬しべ一本程でも互の間に好意が残つて居るうちは、せめては其をかたみとして互にわけ、別々に生きるといふことの出来ない愚かなものなのだらうか。心理的に暴力が加はらなければ——例へば誰か一人の男が現れて、自分を佷から奪ひ去つて、も呉れなければ、自分の處理がつきかねるのだらうか。

底の底を割つて見れば、自分の働き一つで生きて行かうとする將來へのたじろぎが微塵もない、とは伸子に思へなかつた。佷がこの微妙な弱さを氣付かないとも考へられない。彼が腹では、伸子がい

くらしいきり立つても、なにいざとなつて見ろ、と見とほしつゝ、ベイビ、ベイビと甘やかす生活——。伸子は堪え難い何ものかから身を防ぐやうに、両肩をすぼめた。

不意に、匙が紅茶皿にぶつかる亂暴な音がした。向ふの部屋では、いつか音讀が止んだ。飲物を運ぶ足音がした。——もう済んだか。伸子はこの部屋に居るのが厭で堪らない心持がした。夫と口を利くのが苦痛であつた。どつか、暗い、人の居ない隅つこに早くもぐりこんでしまひたい。世の中が變つて仕舞ふ迄寢通したい。……襖が軋んで開いた。板の間を踏んで来る音がする。伸子は咄嗟に、部屋の外の濡縁の方を見た。「隠れたい！」。心臓がその思ひで獣のやうに鼓動した。この衝動は、然し、伸子自身にさへ突拍子なかつた。何故？ 身動きする間もなく襖が開いた。伸子は、自分に喫驚した顔をそのまま、入つて来た佃に向けた。

佃は何か怪訝さうに、椅子の背を掴まへて突立つたまゝで居る伸子を見た。彼は手に浅い箱を持つて居た。伸子は喉の乾いたやうな聲で、

「なにか御用」

と自分から訊いた。

「——ミスタ・スミルノフがこれを下さいましたよ……」

佃は、何か異常な空気を嗅いだといふ風に伸子を上下に眺めた。

「——來ませんか、こつちへ」

伸子は背につかまつたまゝ、横からその椅子にかけた。

「——私變なの今夜。——失禮するわ。よろしく、どうぞ」

彼は箱を伸子の膝にのせて去つた。それは波斯束の砂糖づけの箱であつた。」

四

十二月に入つた或晩であつた。

伸子は女中部屋に坐つて居た。

三尺ほど離れて、とよが、血色よく胸の張つたルノアルの田舎女めいた姿で、せつせと毛糸をまいて居た。壁に新聞附録の美人畫がはりつけてあり、赤い襟が揮發油で洗つて窓の上にかけてある。伸

伸子は心持よく手を動して居た。小さい時分、母の前に坐つて糸を巻く手傳ひをした。伸子は、しんなりに奇麗に巻いて一杯種々な色をとりまぜ入れてあつた小町糸の箱を思ひ出した。それが樟の用筆筒に入つて居た。引出しをあける時、ぶんと樟の香がする。母はいくつ位であつたらう。彼女はどうか和やかな心持でさへあつた。

「とよや、いつもはどうして居たの。一人で出来たの？」

「普通の糸なら引つばつてかたく巻いても平氣でございますから、一人で出来ますんですけれど」

とよは伸子が飽きたと感違ひをし、急に手を急がせた。

「いゝのよ、ゆつくりで。私も面白いから——これからも云へば手傳つてよ」

「有難うございます……」

とよは何か、微かに表情をした。伸子はそれを感じ、笑ひに紛らして云つた。

「——もつとも、私みたいに家に居付かない人を當には出来ないね」

四オンスめの糸が五六本、細いわくになつて伸子の手頸に絡みついて居る時、佝が部屋から呼ぶ聲がした。とよはあはて、頭を下げながらいざりよつて、毛糸をとりのけた。

佝は机の前に居た。

「何御用？」

「一寸」

「何なの」

伸子は机の横に立つて夫を見た。佝は脚に毛布を巻きつけて居る體を椅子の上で反すやうにして、

伸子を凝つと眺めた。眉をよせ、額を皺にし、悲痛な眼付で猶も見ながら、垂れて居る伸子の手を執

つた。伸子は彼のさういふ表情が何となく居苦しかつた。

「何なの、御用は」

「——今夜は少し眞面目な話があります」

伸子は佝の執つて居る手を引込めた。

「ちやあ一寸待つて頂戴ね」

伸子は隣室へ椅子をとりに行つた。行き乍ら、楽しみなやうな、見當のつかない不安なやうな氣が

した。何を彼は云はうとするのであらう。

「少しそつちにやつて——さう、有難う」

伸子は斜に彼と相對する位置に椅子を置いた。

「何はやく暫く、沈黙したまふ腕組みして居たが、やがて傍から、四つに疊んだ懐紙をとり出した。彼は其を伸子に渡した。」

「……いやだらうが見て下さい——其那ものが昨夜出た」

伸子は、開いて見た。ぞーつとした。一度伏せ、更に見なほした。紙の間に、黴みかゝつた桃色の、花瓣が破れた大輪朝顔の押花のやうな血痕がついて居た。

「いつなの？ 昨夜？」

「風呂を出てから——こゝへ来ると變にむせるやうになつたから、それに唾をとらうとしたら其かものが出た」

「今日は？」

「何ともない」

伸子は紙を机の上に戻した。

「變ね——兎に角安静にして居なければいけないわ——何故黙つてゐらしつたの。鹽水がいのよ、直ぐ其時飲むと……」

伸子は又、伸子の手をとつた。

「——私は永い間、随分體を無理して来たから、きつと永いことはないと思つて居ました。日本へ歸つたら、きつと如何かなるだらうと思つて居たのに、よく今日まで保ちました。——君も、随分苦しんで居るのは知つて居るが、せめて私の生きて居る間は——さう長くもないのだから、一緒に生活して欲しいと思つたので、いろ／＼云つたが——もう止める権利がなくなつた。——どうか——自由にして下さい。私はもう、決して引き止めませんよ」

伸子は、見たものからは或程度動かされて居た。けれども、何の云ふことは、感傷的すぎて聴えな。考へて居ると、彼は益々、伸子を手ごと自分の方に引よせ乍ら、訴へるやうに云つた。

「——本當に遠慮はいりません。斯ういふことになれば、私は、君からあゝいふ話が出て居なくなつて、自分の傍に置かうとは思はないから……ね」

伸子は猶、黙つて居た。何は長く伸子を凝視して居たが、聴て、

「——あゝ」

と吐息をつき、椅子の背に靠れた。彼は感傷に堪えぬやうに頭を揺つた。

「到頭来たか……」

伸子には何の云ふことが、何かびつたり来なかつた。病氣は病氣で別問題といふ氣が、ひどくはつき

りした。病氣になつたから去つてもよい——彼の提議には、何か矛盾した、悲壯感に驅られた氣ぜしさがあるやうに、伸子は感じた。

「——だつて——さうせつについて考へるには及ばないぢやないの。第一、病氣だつて何なのか、まだ定りもしないのに——」

伸子は、却つて彼を云ひなだめようとするやうな餘裕ある心持で、笑さへ浮べた。

「あとで貴方の思ひ違ひだつたつて騒ぐやうな事になつたらどうなさること？」

「其那ことは決してない——私にはよくわかつて居ます」

「考へて御覽なさい」

伸子はいつの間にか、佾の腕を着物ごと抑へつけた。

「假に女中だつて、病氣の主人を置いて出られるものではなくてよ。——出来ないことは仰云らない方がいゝのよ」

「出来ないことぢやない」

「どうして？ 貴方は本當に、私が悦んで云ふ通りにすると思つてゐらつしやる？ 兎に角、まだ何も仰々しく云ふ時ではないわ。——明日津山さんをお呼びませう」

これは不思議な感情であつた。時には殺して仕舞ひたいと思ふ佾、この關係から逃れたい、逃れられたらどんなに嬉しいかと思つて居る伸子の心に、次第々々に悲しい歡びとでもいふやうなものがさしよせて來た。彼女は靜かに云つた。

「——何が仕合はせになるかわからなくてよ……私共はこの頃、ひどい貧乏人だからね——心が——だから、何だつて役に立てようと思へば立つかも知れなくてよ」

佾の病氣が生活の目標を變へ、従つて二人の心持にも變化が起り、互の生活に圖らず新生面が開けまいものでもない氣が、ふつと伸子にはした。少くとも、病氣を癒さうといふ共通の目的が二人に授かる。——

却つて、活を入れられたやうな心持で、伸子は椅子をずらした。

「——大したことでないには定つて居るけれど、もう横におなりなさい」

佾はすつかり惻れ、伸子の云ふなりになつて床についた。

「さあ、元氣を出して！ 昔の人みたいなら考へ方は駄目よ。若しさうなら水野さんのお弟子にならなけりや」

水野といふのは、教育で知り合ひになつた高等工業の教授であつた。染色研究に來て居るうち、師

を冒され、ひどい咯血をした。彼はすぐハドソン川向ふの療養所に入り、一年模範的な休養をして、すっかり固めた。十月中旬市に歸つて来た時、伸子も始めて紹介された。その時、彼は久々に日本語を話す愉快さと、一つの事業をなしたとげた人間の計りしれない満足とを以て、一晩ぢゆう、自分の病氣と最新の手當、経過等を彼等に話して聞かせた。

その時の話の中から覚えるともなく覚えて居た注意によつて、伸子は彼の床の中に湯たんぽを入れ、火鉢を部屋から出した。そんなことをし乍ら、彼女は、水野が、

「庭にラズベリーの繁みがありましてね、雪が積ると胸鳥が遊びに来い／＼しましたよ。」と、如何にもその光景に慰安されたらしく、追回して話した調子を思ひ出した。

五

伸子は自分の机にかへつて、津山へやる手紙を書いた。

「一昨夜、血液の混つた唾が出たと云ふので大層氣にして居ります。何卒一度御來診下さる」

彼女は

「とよ」

と呼んだ。

「これを、明日の朝九時に學校へ届けて御返事をいたゞいて来て頂戴、間違ひなくよ」

津山は仰と同じ學校の校醫であつた。

翌朝早いと思つて、伸子もその夜は早寢にした。仰はいゝ工合に熟睡して、伸子が入つて行つたのも知らず、微に鼻をかいて居た。

横になつて見ると、伸子は、自分が極めて平靜な積りにも拘らず、底では亢奮してゐるのを知つた。夫を落膽させまい心持があつたと見え、何だか病氣も判らなさに云つたが、伸子に其がコンサムブションであらうことは殆ど疑ひなかつた。彼が廿代に痔瘻を患つたことのあるのを聞いて居た。始終腸に苦情があつた。彼の生國は縣別にして一番、さういふ患者の多數なところであつた。然し、さう激烈ではなささうだし、彼はもう四十になつて居るのだから急變はあるまい。断片知な知識で、伸子は大體の結論をつけた。

それにしても、何故自分がこの事を突然の不幸と感じないのだらうか。伸子は怪しんだ。暗闇に横はり、斯うして彼の寢息を聴いて居る。——騒ぎ立てる程特殊な驚きも、急激な歎きも傳つて來ない。同時に、あれ程執念深く互の間にある確執が、今夜だけにしろ、すつかり消えたやうなのに伸子は氣づいた。中和した状態であつた。——彼が、夫婦といふ關係をとりぞいても、人として、健康な自分の助力が入用になつた故だらうか。

pity…… pity akin to love……

線香花火のやうに其等の文句が點いたり消えたりした。伸子は、彼が事實をかくして居た一日の間の心持など考へ、森とした氣持に成つた。

伸子は、寢がへりした。何も此方に向けて眠つて居るらしい。彼のはく息が二つの床の中間で自分の息と入り混るのを、伸子は寒い夜氣の中で感じた。その感じは異常に鋭い意識を伸子に呼び醒ました。伸子は思はず息をつめ、愕きを感じつゝ、闇の中で眼を睜つた。彼女は、永いこと無意識につめて居た息をはき出すと、次の吸ひこみを自然にそつちを向いたまゝでは出来なくなつた。伸子は、出来るだけそろ／＼布団の中で仰向きに向きなほつた。伸子は、自分に對し皮肉な心持になつた。朝になつて、伸子は夢を見た。

伸子が血を出したと云ふので、自分が醫者に電話をかけて居るところだ。何處の電話か、受話機を握つて居る手のひらの感觸と、送話口の光つたニッケルだけが、はつきり見えて居る。傍に、その女中が縞の着物を着て立つて居る。自分は無智な女中に、伸子が血を出したと云ふのをきかれるのがいやで、送話口へ延び上り、懸命に、

「伸が blood を出しました」と云つた。

それぎりで目が醒めた。醒めた後までも、其 blood と氣をつけて發音した舌の感じが、變に現實的に残つて居て、伸子は悲しい心持がした。

津山は一時前に見えた。伸は細かに、容態を説明した。すつかり、醫師と患者といふ態度であつた。

「それは御心配でせう。然し、長い時間に亘つて聲を出す職業——お互のやうにね——よくやられますよ。結核でなくとも、それに何です、X光線でも見れば、十人の中七八人までは痕跡を持つて居るもんですからな。つまり無意識の中にかゝつて、無意識の中に治つてしまつて居るのです。人間は此で、なか／＼うまく出来て居ますよ」

彼は、血色のよい、然し神経質らしい手つきで、聴診器を出した。

「どれ——一寸拜見しませうか」

伸子は本氣な顔つきで、襦袢を脱いで胸部を出した。どこにも病氣などなさうに胸廓の廣い厚い胸であつた。

「—確りした骨格ですね」

醫師は、精神療法として、伸子の皮膚に指先をふれ乍ら云つた。

「ほら、貴方の皮膚はかうやつて見ると、充分脂肪もあるし、血色もいゝし、弾力もありませう。どうして、本ものとなつたらかうは行きません」

「大きい息をして。小さい息をして」

「大きいのをもう一つ」

伸子は傍で見て居て、そのとき、夫がしんから衰れになつた。津山に命じられる通り、彼は眞心こめ、眉を上げ、大きい息を吸ふ。氣をつけて小さく息をする。伸子は、彼が此那に眞剣で全心的なのを、どんな場合にも見たことがなかつた。彼も生きたいのだ。其でこそ正直だ。伸子は、鼻のしんが酸っぱく、しみるやうになつて來た。手洗ひを用意して戻ると、もう伸子は着物を着かけて居た。

「いかにです」

アルコホルの香のする脱脂綿の薄片で、聴診器を目立たぬやうに拭き乍ら、津山が答へた。

「別に私は異常を認めませんね、一寸——ほんの一寸、左の方に雑音があるやうな氣もしますが、その位のこととは、一時的に誰しもあり勝のことですから」

伸子は、今朝から自身を非常に劬り、聲さへ力を入れて出さなかつた。彼は、津山の診断だけでも勢づいた。

「—有難う。——色のついたものなんか出たんで、すつかり喫驚してしまひました」

「さうですね、素人の方は。然し却つてその方が安心ですよ、早く氣をつけるから……」

伸子は、お手洗ひを、と云はうとして、思ひついた。

「恐れ入りますけれど、お次手に私も一度御覽いたゞいて置ませうかしら」

伸子は何處にも異常なかつた。津山は、明日K病院の呼吸器専門の人と、又來ると云つて歸つた。

「御覽なさい！ 私の云ふ通りでせう」

伸子は醫者を送り出して來て、云つた。

「——いや、然しまだ判りません、専門家が見ないうちは」

「いやね」
と伸子は笑つた。
「ヒステリーのお嬢さん！ 重くないとお氣に入らないの？」
然し、其夜寝ようとして、夜具を引上げた拍子に、仰は又少量の血液を出した。彼は精神感動の方が強くて、眞蒼になり、氷のやうな四肢を震はせた。

六

日曜日に、伸子は動坂へ行つた。
門に自働車が止つて居た。伸子は玄關で訊いた。
「お客様？」
「須田のお嬢様がたがいらつしやつて居らつしやいます」

「父様は？」
「お客様でございます」
「あゝ別なの」
暖爐の傍に、須田の三人の子供と、三人の伸子の弟妹、母とが居た。彼等は、前ぶれなしに入つて行つた伸子を見ると、一どきに、それ／＼の聲で、
「わーッ」
と歡聲をあげた。

「こんにちは。丁度よかつてね。私達一時間計り前來たところよ」
「おあつらへむきだつたね、さつき電話でもかけて見ようつて、云つて居たところだつたよ」
「さう。一暫く」
伸子は手袋をぬぎ乍ら、従妹たちに挨拶した。
「久しぶりね。この前、準ちゃん御結婚の時會つたぎりね」
「だつて伸ちゃん、ちつとも来て下さらないんですもの」
割込んで腰かけると、カーテンの仕切から、つや子がこつくりしたい、黄色の毛糸のスウェーター

を着て出て来た。

「お姉ちやま、泊る？ 今夜」

「さあ——。つやちゃん今日はおしやれね、どうしたの？ そのスウェーター」

「鈴ちゃんが編んで下すつたの」

「いゝ色だね、子供には其那色もいゝと見えるね」

「つや子は髪が黒いからなほ似合ふ、つやちゃんは何を御禮するの？」

つや子は考へて居たが、極り悪さうに、

「僕も編んだげるわ」

と答へた。すると、保が、頓狂に振向いた。

「え？ 君が編む？ つや子の編んだ袋ね、僕見たけど、まるで貧弱つたらないの。赤くて、小ぢや

くて、穴だらけよ」

皆がふき出した。高い窓から霜げた譲葉の梢が見えるのが、冬の日曜らしく長閑であつた。

伸子は、卅分ばかりして、母に訊いた。

「私父様に伺ふことがあつて来たんだけど——お客様ながいの？」

「さうだね」

多計代は時計を眺めた。

「おや、もう二時間餘になるね、もう直きだらう、何か會社の方の關係らしいから。泊つてつたつて

いゝんだらう、今日は。さうおしよ」

伸子は蒸しすしをたべながら、

「今日は逆も駄目よ、御病人だから」

と云つた。

「へえ」

多計代は意外さうに訊いた。

「佃さんかへ？」

「こないだから寝て居るの」

事もなげに、多計代は呟いた。

「又例のおなかだらう。相變らず弱いねえ」

「おなかぢやあないのよ今度は。——」

其處へ、父が入つて來た。

「やあ。來たね」

伸子達は、揃つてぞつくりと立ち上つた。

「今日は。」

「こんにちは、伯父様」

「こんにちは！」

父はおどけて、眼鏡を鼻の先にするこかせた。

「こりや大變だ！ うちの子が倍になつたぞ。どれがどれだか見分けがつかない」

騒ぎが鎮つてから、伸子は父に訊いた。

「父様、いつだつたか、いゝ寢臺のカタログを見ておらしたことがあつたわね、あれ今でも在るこ

と？」

「さあ——探せば勿論あるが——買ひますか」

「一つ欲しいと思ふの」

彼は暖爐の火をほげ乍ら、

「いっ！」

ときゝかへした。

「——どうせ買ふなら二つがいゝだらう？ 健康的ですよ——うちも、頑固婆さんさへ承知してくれ

ば寢臺にするんだが」

伸子は來た用事をきめたく、冗談にのらずに續けた。

「佃が少し工合わるいんでね、疊の上に寝て居られると歩くに氣がねだから、一つだけさし當り買ひ

たいのです。——何處？ デスクの中？」

伸子の後について、父もデスクのところに来た。

「其處ちやあるまい、そつちの綴ぢ込みの中だらう。Bのところを見て御覽」

彼等はカタログを見つけ出し、子供達がダイヤモンドをして居る傍を抜け、暖爐の前にさし向ひに

坐つた。父は心配さうに見えた。

「どうしたんだね一體、ずつと悪いのか」

伸子は腹案を立てゝ來た通り、軽く答へた。

「無理をしたと見えて喉の奥をわるくしたのよ。一學期位休養すればいゝんですつて」

母が、むかふから、見徹すやうな表情で自分の云ふことを聞いて居るのを、伸子は感じた。

「其りやいかん。醫者は誰か信用のある人を頼んだかい」

「父様御存じでせう。Kの芹澤さんといふ人」

伸子はカタログを検べ、店へ電話をかけた。月曜に届けるといふ事であつた。佃は、三度目の精密な診察で、初め怪しかつた通り、左に軽微な浸潤のあることが明かになつたのであつた。けれども、

伸子は、萬己を得なくなる迄、彼の病状の詳細は両親に告げない積であつた。そろ／＼かへらうとして居ると、女中が呼びに来た。

「奥様が、一寸御炬燵へいらしつて下さいましつて」

伸子は、用向が直覺され、いやであつた。濫々襖をあけると、多計代は炬燵に當つたなり首だけ振向けた。

「時雨て来たね何だか。——あつちぢや、がや／＼して困るから、一寸話したいと思つて」

伸子は膝を入れた。

「佃の病氣についてだがね。——本當に大丈夫なのかい」

「なにが？」

「——單純に喉なんかぢやあるまい？」

「何故？」

「いつか来た時の顔色は、どうもたゞぢやあないと思つて居たもの」

伸子は、母に幾分の安心を與へる義務を感じて、

「——いづれにしろ、ひどい心配な事はないのよ。——私がかんなにびん／＼して居るんだから大丈夫な證據ぢやあないの。たゞ、寒さに向ふ時候だから大事をとるのよ」

と云つた。

「お前のびん／＼は當ににならないがね——何しろ困つたものだ——それで何かい、本當に一學期位で元通りになるのかい？」

「多分ね」

伸子は暗い顔で笑つた。

「そりや人間だから分りやしないけれど」

「然し、若し佃が結核でよもあるんなら、それを黙つて結婚するなんて、罪惡だね」

「假にさうとしたつて、前からあつたんぢやあないでせう。さう考へるのは酷よ」

「お前だつて、折角健康なのに——何をするんだつて體が資本だよ。國の父さんのところへは云つてやつたかい？」

「其那必要はないのよ、まだ」

「だつていろく……」

金のことであるのが伸子に推察された。

「本當に大丈夫なの、——」

伸子は炬燵布団をはねた。

「ぢやあ今日は失禮するわ、いろく有難う」

「さうから」

多計代は未練らしく自分も立ちかけた。

「本當に氣をつけなけりやいけないよ。お前まで變なものを背負ひ込んだら、家ぢやお斷りだよ」

部屋を出がけに、彼女は皮肉に呟いた。

「——まああの人にすれば、却つて都合がいろといふもんだらう。斯うなると、出ると云つても出られるお前ぢやないんだから……」

伸子は母が憎々しく、然し眞實を言ひ當てたのを感じた。

七

重いスーブ皿を載せた盆を持ち、伸子はそつと唐紙をあけた。

一切炭火が入らないので、室内の空氣は清らかで、すがくしかつた。硝子戸越しの麗らかな日光が寢臺の金具に燦いて居た。

「いゝ氣持ね、こゝは。——頭がすつとするやうよ。」

返事がない。——伸子はしまつたと思つて、首をすくめた。側は眠つて居ると見える。

伸子は俄に忍足になつて、枕許に近よつた。音を立てないやうに傍の小卓に盆を下し、枕の上を覗いた。彼は眠つて居るのではなかつた。仰向いて天井を眺めて居る。唇を引締め、上瞼を引つらすやうな眠つきで、一點を凝視して居る。何かと思ひ、伸子は自分も一寸天井を仰ぎ見た。

「どうなすつて」

「……………」

「——眠つてゐらしつたの？」

伸子は、のろ／＼眼球を伸子の顔の上に動かし、悲痛なやうな、訴へるやうな眼差しで、元氣に立つて居る伸子を眺めた。

「——眠つてなんか居たんじやありません」

非難を含んだ語勢に、伸子は始めて、佢が、彼女から見えなかつた側の手に小型聖書を持つて居たのに気付いた。伸子は、それを見ると説明しがたい不快を感じた。夫が床についてからもう數回彼女にこんな情景を目撃した。その度に、同じ新しい鋭い全身的な不快が伸子の胸に湧いた。慢性腎臓炎にかゝつても、佢はやはり聖書を片手に、このやうな表情をするであらうか？。日本へかへつてからは、平常聖書など讀まず日を送つて居た佢が、床についてから、自分を最も不幸な境遇に陥つた者らしく取扱つて、陰慘に聖書をひねくるのが、伸子には、惨めなやうな、耻かしいやうな、堪らない心持なのであつた。伸子は、自分の感情を制し、何も見なかつたやうにスリーブをすゝめた。「さ、熱いうちに召上れな。冷えたら、クツクがクツクだから仕方なくなつちまつてよ」

佢は、伸子の明るさを撥ねかへすやうな眼付で、寝臺の上に起なほつた。黙つて匙をとつた。義務のやうにスリーブを吸ひ乍ら、白眼のはつきりした神経質な視線を時々あげて、傍の伸子を見た。

伸子は、何か自分が理由の分らない詰問でも受けて居るやうに窮屈を感じた。

「どうなすつたの？——工合がよくないの？」

「いゝや」

「——ぢやあ氣を引立てゝ召しあがれ、ね。貴方なんぞもう恢復期よ。何も滅入る必要なんかないのに。——平靜で居る方がいゝのよ」

「——有難う……………美味しかつた」

佢は皿をかへし、サーヴィエツトで口の邊をふき、云つた。

「氣の毒です。……………君は健康だし」

「どうして」

「此那だから——私が」

「病氣のこと？」

佢は、返事の代り太い吐息をついた。

「——そりや誰だつて病氣より健康の方がいゝわ、でもお互になつたら仕方がないし、最もよく治すやうにするだけよ。そりやかまはないけれど——何ていふか……」

伸子は、皮肉にならないやうに云つた。

「氣の持ち方とでもいふか——何故かういふ病氣、他の内臓の病氣を扱ふやうに扱はないんでせう。

——危険がない程度なら、却つて頭がよくなつていゝ位に、ぐんと思つてしまふ方がいゝのよ」

「——兎に角、幸福な人間は成らない病氣だ」

今度は伸子がどんより、恐怖を以つて徐ろに彼を見下した。……これは一つの暗い啓示であつた。

伸子は夫の病氣は病氣と思つて居た。何は單純にさうは思つて居なかつた。伸子が生活に落付けないで彼を苦しめるからだ、と云ふのだ。——

皿を抱へたまゝ、伸子は凝つと立つて居た。彼女は、此處まで來ても循路のなかつたのを知らされたやうな沈着を心に感じた。病氣に、心と心との撃ち合ふ音のない争ひを熄めさせる力は、なかつた。

夫が今は病氣だから、ひとりでに飭り助けて居るが、つきつめたところへ行けば矢張り彼を受け入れて居るのではない。同じやうに、何も内心では絶えず伸子をこのやうに攻めて居るのか。

伸子は、暗愴とした心持で臺所へ行き、黙つて女中に空のスープ皿を渡した。

何心なく喋り乍ら、何の枕の工合をなほしたりして居る隣間、伸子は不意にこの事を思ひ出すこと

があつた。心が眼を睜つて、氣輕さうに物を云つて居る二人の心底の恐ろしい暗さを照らした。——

伸子は急に苦しく成つて、唇が凍むのを覺えた。自分が何に行届いた看護をしようとするのも、愛

からではない。自分が冷酷でありたくない——つまりは自己満足のためだ。伸子にさう囁くものさへあつた。自分がもつと生一本な人間であつたら、このやうな仁者ぶりは蹴とばしたらう。

全く自然にやりかけて居た自分の單純な行爲まで、變に偽善的などころがあるやうに思はれ、伸子

は苦々しく痛む心で、いそいでやりかけのことを片づけて仕舞ふ。何に其が、伸子のむら氣、面倒く

さがりとしかとなれないのがよくわかつた。伸子は悲しかつた。自分が何でも、憎らしく感じるだらう

——これは切ない事であつた。

或宵、伸子は暫く自分の部屋に入つて居た。氣がつくと、家ちゆうひどく森として居る。彼女は一寸耳を敬て見えた。自分の部屋だけ残して、周囲が消え失せたやうな静けさだ。伸子は、不安に襲は

れた。體で椅子を押しつけ、立つて隣の唐紙をあけた。スタンドが灯つて居た。寢臺の布團は、内に

横はつて居る人間の體なりにもり上つて居る。何の變りもない。——伸子は、何の爲に其那不安に攪

まれたか、可笑しくなつた。寢臺の裾の方の壁に、大きい自分の影法師を映し乍ら、伸子は部屋に入

つた。が、夫の様子を見ると、言葉が塞がれた。

彼が聖書を読む——どういふ心からであらうと、其をとやかくいふ権利が自分には、伸子にわかつて居た。明るく讀まうと、感傷をそよるやうに讀まうと、然し、世の中には、神経に徹へるやらかたと云ふものがある。例へば同じ物を食ふにしても、見て居ると腹が立つて来るやうな食ひかたといふのがある。この聖書で、佷は、何を自分に思ひ知らさうとするのか。

伸子は、佷の顔を見下した。彼は、伸子に見下されて居ることも、その視線には、足踏みするやうに強い感情がこもつて居ることも恐らく感じて居るのに、睫毛一本動かさなかつた。強情な凝視を、足下の壁から離さない。伸子は次第に辛棒しきれなくなつた。彼女は低い、ひしやげたやうな聲で云つた。

「それをこつちへ頂戴——お願ひだから……」

彼女はさう云ひ乍ら手を延した。

「……………」

佷は、布團から出して聖書をもつて居る手の拇指がまむしになる程力を入れて其を持ちなほした。

伸子は荒々しい心持を制せられなくなつた。

「——頂戴」

彼はよこすまいとする。

「頂戴」

あゝ、自分は何をしようとするのか。佷の體に悪い。恐ろしいことになるかもしれない。恐ろしいことになればいゝのだ、一思ひに！一思ひに！佷は蒼白な顔で伸子を睨み据ゑたまゝ、手を上げたり下げたり、渡すまいとする。伸子は其を本氣で追ひ廻した。追ひ廻すうちに、伸子は、自分等が可怖くなり、涙をぼたく／＼こぼした。

「頂戴つて云ふのに！下さりさへすりや何でもありやしないぢやないの！」

奪ひとつた聖書を伸子は、寢臺の下にたゞきこんだ。彼等は二人とも泣いた。

八

二月下旬に、佷の健康は、學校へ出勤しない事、朝おそくまで寢臺に居ること、夜外出出来ないこと

位で、殆ど平常に復した。

冬枯の庭はいつか潤ひ、こまかに木の枝などを眺めると、仄かな艶や芽のふくらみが優しい早春を感じさせる日であった。

佃は、井戸の横で、木戸の繕ろひをして居た。厚く着ぶくれ、スキーにでもかぶるやうな毛絲帽を耳まで引かぶつた彼の様子は五十位の年寄に見えた。

「——其那に力を出していゝの？私打ちつけて上げませうか」

「何、大丈夫です、此位——一寸針金を持つて来て」

伸子は、納戸へ行きかけた。

「あゝそれから時計を見て下さい、机の上にある」

伸子は、針金の束と、針金切の鋏をもつて戻つた。

「一時十分前よ」

「もう？ ぢや仕度しなくちやあ」

佃は、いそいで仕事をしまひかけた。

「——何處かへ行らつしやるんだつたの？」

「えゝ、君も仕度して下さい」

「出しぬけね」

伸子は、とよを顧みて笑つた。

「そんなら早く仰云ればそのやうにして居るのに。おしやれで二時間もかゝつたらどうなること？」

伸子が着換へをして居る部屋へ、佃も手を洗つて上つて來た。

「和服にしよう」

「さうお——和服つて、いつものつきやあなくつてよ——一體どこなの、行くところは」

「いゝんです、このまゝ行つたつてかまはないところなんだ」

「さうごー」

「行けばわかります」

「動坂」

「さゝや」

「——知らずに行くのでいゝところなの？面白いところ？」

「さあ——多分さうだらうとは思ふんだが」夫の爲に、足袋や何か揃へさせ乍ら、伸子は、頭の中で

これから自分達の行きさうなところを方々さがした。

「ね、頭字だけ云つて。當てるから」

「行けば判りますよ」

此那ことは、彼等が結婚して以來、始めてのことであつた。何は興にのることなど、楽しい不意打ちで對手を悦ばせる計畫をするといふことなどない人であつた。他處へ行つても、豫定の時間に歸ることを忘れない人が、珍しいことだ。

彼等は、近所から電車に乗つた。

「——本郷……看町。一枚」

看町……。伸子は、何の隣に腰かけ、眼をしばたくやうにして考へた。彼等の交友範圍は狭かつた。二人で訪ねて行く處など、決して思ひ出せない程はない。看町——伸子は覺えず、

「あゝ、わかつた」

と、口に出した。

「わかつてよ」

何は、正面を向き、外套の下で腕組みしたまゝ訊きかへした。

「どこ？」

「でも、やつぱり確ぢあないわね……。阪部さんかと思つただけだ——東京に来てゐらつしやるんでせうあの方今——どつか——大學正門邊なんぢやあなかつたかしら、宿が……」

何は、どつちにでも取れるやうに笑つた。

「ぢやあさうしてお置きなさい」

阪部は、地方の大學に植物學の教鞭をとつて居る彼等の親しい友人の一人であつた。上京すれば會はない事のない間柄であつた。

案の定、何は、大學正門前へ來ると立ち上つた。

「降りませう」

そして、果物屋の横を眞直に入つた。或西洋料理店の前に、白服、白前垂に大きな料理帽をかぶつた料理番が立つて、ぼんやり彼等を眺めた。少し先の社の前に風船屋が出て居た。伸子は、穩やかな午後の往來を、複雑な心持で歩いた。夫婦とは、或は人間の生活とは、何と妙なものであらう。この間の晩あのやうに泣いた二人が斯うして連れ立つて歩く——前ぶれなしに、阪部訪問になど自分を連れ出す氣になつた夫の氣持が、伸子には、或思ひ遣りを起させた。

本郷臺を、小石川の方へ下る坂の右側に、御下宿、と書いた中古の看板をかけた門があつた。何はそこを入つた。裾を端折つて通りすがつた女中に、彼は聲をかけた。

「おいでですか——阪部君」

「はあ、どうぞお通り下さい」

女中は、伸子を觀察し乍ら、スリツバを二足揃へた。何は、案内を待たず、どんく／＼自分で中庭を廻つた廊下を進んだ。

「まあ！いつの間にか被來つたことがあるのね」

その聲を合圖のやうに、廊下が鏗のてに曲る角の柱の下へ、阪部が姿を現した。

「やあ」

「よくいらしたね、さあどうぞ」

阪部の部屋は、窓から坂の下の樹木や屋根の見晴らせる、静かなところであつた。伸子は、その窓に腰をかけた。

「割合いゝお部屋ね、餘り下宿らしくなくて」

「昔、私がまだ書生の時分からの知り合ひでね、こゝの親爺は大の阪部黨ですよ」

阪部は自分で茶を入れたが、何に訊いた。

「どうだね、ずーつと順調かね」

「うむ。もう自分ぢやあ何ともないやうだが、三月一杯我慢しませう。——然し氣になつてね」

「はゝゝゝ。勤人根性といふ奴があつてね、出るべき時に休んでは、休みも休みにならないといふ評か——まあ、休める時にうんと休んで、潜勢力を貯へることだね」

伸子は、阪部にだけはどんな口も利いた。

「ね、阪部さん、今日はどんな素晴らしいことがあるの？」

「どうして」

「だつて——二人で喋り合せてゐらしつたんでせう？」

「これは弱つたね、はゝゝゝ、何か、では特別な趣向でも凝すんだつたが、もう間に合はない——晩の御馳走で勘辨して下さい」

阪部は、二重瞼の、眼尻に小皺のある眼で、しげ／＼伸子を眺めた。

「——貴女は相變らず元氣ですね」

伸子は、肩を落すやうにして唇を曲げた。阪部は、彼女の感情を見抜いたやう直ぐ押しかぶせて

「いや、元氣なのが本當だ」と云つた。

「總て、生きて居るものは元氣なのが自然だ。眞の元氣は、見やうによつて、一種聖なる天の力の反映みたいなものですよ」

去年の夏、丁度側が關西方面に旅行中のことであつた。伸子が動坂の家から病院通ひをして居た頃、阪部が上京した。彼は赤阪の家の留守番から二人の消息をきき、動坂へ訪ねて來た。伸子は、父親にも紹介し、三人で夕飯を食へた。その時、彼等は、主として、C大學に居た頃のことを話し合つて興じた。

伸子は、

「貴方もあの頃は、今のやうに大家じやなかつてよ」と笑ひ乍ら云つた。

「一生懸命だつたわね。ほら、あの微だらけの林檎を大事にしてゐらしたこと！」

「ふむ」

阪部は、檢微鏡を覗きつけた眞直な平らかな視線でやゝ暫く伸子の顔を見て居たが、突然云つた。

「——貴女——こんなことを伺ふのは失敬かもしれんが——幸福ですか？」

伸子は、いきなり苦しい胸の眞中を、すばりと射られたやうに感じた。けれども、彼女は或耻しさから笑ひ乍ら云つた。

「——其那らしい細胞の變化が現れて居ること？」

「……貴女に無駄なことはなからう。——結構だ。まあやれるだけやることだ」

矢張り、笑ひ乍らだが、伸子は思はず涙を泛べた。彼女に此那風なことを、此那工合に云つた人はなかつた。

伸子は今坂部に會つて、再び其時の心持を思ひ出した。

「——今年に雪が降らないと云へば——」

阪部は、日本服で別人のやうに見える背を丸めて、机の下から厚い紙挟みを引き出した。

「今度はこれを印刷することも一つの用で來たんだが」

伸子は、菓子鉢や茶器を片寄せた。

「専門的に云ひ出すと、又面倒くさいことになるんですがね、つまり、要點は寫眞が説明して居るだけだ。——先づ、これが——何と云ふかね、序論かね」

其は、櫻に似た一本の樹の寫眞であつた。眞直に幹を延し、左右ゆつたりと枝を張り、花をつけて

居る。伸子等は黙つて眺めた。

「次は、これ」

「——嵐のあと？電線が切れて居るし、家は倒れて居るし」

「阪部とでも話すよりはきゝ、彼の働が訊ねた。」

「何處？満洲邊らしいね」

「あゝ北満洲ね。ひどい有様でせう、毎年或期間期節風が吹く、それは此那勢だといふことを示した

もの」

「次のは、幾本もの大木の梢が皆一方へ振曲げられ、片側は丸坊主に枯れたやうになつて居る寫眞。」

「——關係がわかりますか？」

伸子は面白くなつて來た。彼女は、熱心に見較べ、

「えゝ、判つた！判つた！」

と叫んだ。

「其から」

六枚の寫眞は、毎年の季節風の爲、満洲或地方の樹木が發達を阻止され、一定の法則をもつて變形する。畸形になる。その經過の研究なのであつた。

「——これは、ずつと先に集めて置いた材料でせう？」

「——十年近くなるかね」

「……然し、同じ研究でも君のはいゝね。僕の方はやり切れない。何しろ事實材料をディッキン

グ・アウトするのだからね」

「日本ぢや駄目かね」

「——、貧棒暇なしさ、食はなけりやならないからね」

寫眞を又繰返し眺めて居た伸子が云つた。

「——食べなけりやならないのは誰だつて同じよ。十人の中九人九分までさうだわ」

「さうです」

「彼は、不意な伸子の言葉で感情を害したらしく云つた。」

「然し、僕の研究では、教師にもなれないからね」

「自分の専門で教師をしたつて君、樂ぢやあないよ。いつでも、自分の力以下の學生對手でやつて行く

のは。——それにやつぱり本當のラバトリー・ウオークは別さ。——却つて、別のことを講義して本職は本職でこつ／＼やる方が純粹な楽しみがあるかもしれない」

「——時間がないね、實に」

「何時間です？」

「十一時間」

「其ならまだよろしう——」

「——僕の方の仕事なんぞは、一言見つけるに、一日どころか三日四日かゝつても駄目なことがあるんだからね」

伸子は、専門如何に拘らず、熱のこもつた仕事ぶりに刺戟される性であつた。阪部の、兎に角ものにして行く努力を見ればかりの時、夫の自身の仕事についての愚痴が、彼女の仕事魂とでも云ふやうなものにさはつた。

「まるで、それでは仕事の出来ないの、阪部さんの責任みたいね……」

其處へ、伸子さへ豫期しなかつた工合に、こんぐらかつた夫婦の齟齬が絡つた。

「だから、私の云ふ通りになさるといふのよ。さうすれば、學校は研究の云ひわけ、研究は學校の云

ひわけ、と云ふやうな面倒なことにならなくていゝわ」

「全く面倒だね、はゝゝゝ」

阪部がとりなすやうに笑ひ出した。

「何です？伸子さんの云ふ通りと云ふのは」

伸子は、表面明るい快活さで、すらりと云つた。

「私がいゝ提議をしたのよ。もう、旦那様、奥様で、何一つ確なこともしない癖に體裁だけ意義あるやうに構へて居るのは澤山になつたから、元の書生にかへりませう、つて。いゝでせう？そして、二人で、本當に自分の力を活かして遣れるとこまでやつて見れば結構だわ、ね……」

軽く切り出したのが重々しくなり、伸子は悲しげな顔をした。彼女は、自分に此那話をさせようと働が此處へつれて來たのでないのはよくわかつて居た。こゝに夫が居なかつたら、彼の顔、彼の聲、ぼき／＼節を鳴らす手の指が見えなかつたら、恐らく自分は此那ことは云ひ出さなかつたらう。伸子には、特に其が苦しい心持を起させた。彼女は、むつつり黙り込んだ。

働が、溜息と一緒に、

「——なか／＼むづかしう」

と云つた。

「我々は互に仕事があるからね、どうも」

阪部は、そろ／＼日のかげつて来た部屋の火鉢に火をついだ。

「——其だけなら、始つから諒解し合つて居ることなんだから別に雑作なからう、もつと、こりや根だね。——根が大事だよ」

阪部は、暫く考へ続けた。

「又植物をかつぎ出すが、何だね、或草や木が生きて居られる、——最も自然ないゝ状態に於てだね——場處といふのはきまつて居るね。地面の上でさへあればいゝといふわけにはどうも行かんらしい——或草は、北緯何度の地帯でしか生存出来ない。或は、赤道附近でしか生きられない。人工で温室に入れたり他の方法を用ひたりして枯れない丈には保てないこともないさ。けれども、悲しいことは、さうされて生きる植物は實らない——繁殖出来ない。——こゝが恐ろしい點だよ。人間も、どんな境遇にだつて、或程度までなら生理學上の命だけは失はずに生きられよう。が、地味が本ものでないと實のらない。理論だが、何だね、能ふべくんば、人間互にその本ものゝ地味を作り、又與へたいもんだと僕は思ふな。斯ういふ話になつたから率直に云ふが——まあ、君等も——強いて一つの小

さい、體に合はない植木鉢の中で揉合つて居なければならぬ事もなからうさ」
何が齒の間から呟いた。

「理想はさうだらう——然し私には出来ません——さういふもんぢやない」
何が——伸子さんの云はれるやうなことかい？」

「さうです」

「………翔びたい鳥を精一杯翔ばせて見るのもいゝ氣持だらうと私は思ふなあ」

伸子は、阪部が、明に自分に好意を持ち、加擔して居るのを感じた。彼女の感情が動いた。好意は嬉しかつたが、坂部にいゝ氣持さうに其那ことを云はれて居るのが苦痛になつた。

「いゝことよ。議論で決定することではないのよ。とんだ巻き添へにお會はせしちやつたこと」
彼等は五時まで話した。

「折角だから夕飯を何處かで食べよう」

「まだ夜おそくなれないから、今日は失敬します。家へ来てくれ給へ、家ならいつまでもいゝ」
廊下へ出ると、坂部が立ち止まつた。

「あゝ一寸待ち給へ、あげるものがある」

坂部は、下駄を廻してくれと云つて、中庭へ下りた。戻つて来た時、彼の手頸三四寸、水につかつた部分だけ、冷たさうに眞赤になつて居た。

「なに」

「東京では珍しいものです、毬藻」

玄關の板敷に立つて、彼は帳場から出させた紙でその縁天鶯紙でこしらへたやうな丸い藻を包み、伸子に渡した。

九

椽側に手をついて、伸子は背の高い硝子罎の中を覗いて居た。罎の水に坂部のくれた毬藻が沈んで居た。

「——何だかこれ色がわるくなつて来たやうね、一向浮上らないぢやあないの」

「さうですか」

「そんなにいつまでも營養が内にあるもんでせうか」

「さあ……」

間を置いて、伸子が尋ねた。

「坂部さん南洋へいつお立ちになるの？」

「まだ一二月あるんでせう、まだすつかり決つたわけでもないんだらうから」

伸子は、水をとるかへた硝子罎を日向へ置いた。

「……貴方、坂部さんをどうお思ひになること」

伸子は、伸子の眞意を讀まうとするやうな用心深い表情をした。

「貴方の思ふ通りでは、どう？」

「さあ、相變らず彼の男でせう」

「貴方の心持、變らない？先と」

伸子は、案外さうな、咎めるやうな眼付できゝかへした。

「どうしてとす？」

伸子は、先日坂部を二人で訪問してから、友情の一部に變化が生じかけて居るのを感じて居た。彼女には、其が三人の爲に遺憾であつた。一半は自分の責任であるといふ感情もあつた。彼女は佝にぶちまけて、あるなら不快を洩して欲しかつたのであつた。

「本當に今まで通りなの」

「さうでない譯がないでせう」

四月の新學期から、佝は出勤し始めた。

初めて出かける朝、去年の暮頃のまゝの服装で彼が靴をはく後に立つて見送りつゝ、伸子は感に打たれた。佝にとつても、伸子にとつても、彼の病氣は一時的な而もたゞの病氣でしかなかつた。病氣だけよくなつた。元の彼になつた。見馴れた制服を着た元のまゝの彼に。その姿を見ると、自分の胸に底潮のやうな悲しみと嫌惡の湧き起る彼に……。「行つていらつしやい」頭を下けたが、彼女は直ぐ其場から勢よく立てなかつた。

夫に對する愛と憎の輾轉反側が伸子の心に又力を盛りかへした。彼女はどこに居ても苦しかつた。其故何處にか心の休憩所を欲して動き廻る。

伸子は、動坂へ屢々行き、泊つた。

或日、佝から動坂に居る伸子へ電話がかゝつて來た。

「明日歸られませんか一寸——阪部君が廿八日に愈々立つと云つて來たから、御飯でも一緒に仕たいと思ふ」

翌日、彼等は三人で夕食をたべに出かけた。すつかり初夏であつた。夜空に、街路樹が軟らかな若葉をそよがせて居た。彼等は、先日やゝ氣まづく別れた軋りなどを忘れ、愉快に喋つたり散歩したりした。伸子はその夜は赤坂へ戻つた。

朝になると、昨夜は星が奇麗に見えて居たのに、小糠雨が降つて居た。その中に、とよが、傘もささず、池を覗いて居た。

「どうしたの」

「金魚が一匹妙なんでございます」

「どんなに？」

「今朝起きて見ますと、一匹やつと遊ぶやうなのを、皆が後からせつせと追ひ廻して居りますから、弱つたのを助けて游がせてやるのかと思つたら、いちめて居りますんです」

とよは、

「ほら又！叱つ！叱つ！」

と水の上で手を叩いた。

「何故いちめるんだよ、可哀さうに」

伸子も手傳つて、弱つて居る金魚だけ別にしようと、擔網をさがしたが見當らなかつた。

「斯ういふものは妙だね。こないだ夜、一匹犬が自動車に轢かれてキャン／＼鳴き乍ら逃げるのを、

矢張り多勢ほかの犬が追つかけて咬みついたの見たよ」

そんなことをして居るうちに、伸子は、この間ちゆう椽側に置いてあつた筈の硝子壺が見えないのに氣づいた。

「おや、あの壺どうした」

「どの壺でございますか？」

「あの、青い真圓い——ほら、この間私が缺で散髪してやつた、圓い藻の入つて居たの」

三月程経つうちに、穂藻は段々青々した始めの色を失ひ、水を透して見ると、球状の周圍に、ホヤホ

ヤ水あかのやうなものが認められるやうになつた。この前、動坂から歸つた時、伸子は、

「これはいけない、枯れ出した。一つ散髪をやつて見よう」

と、とよに手傳はせ、藻の表面の老廢物を丁寧に挾んだ。

「これでございませうかしら」

とよが聽て、叱られる覺悟といふ風で、空つぼの、乾き切つた壺を持ち出して來た。

「無しの？藻は」

「こないだ、旦那様が溝にこれをおあけんなつてゐらつしやいましたけれど——お棄てになりましたんでせうか」

伸子は黙つて、暫くとよが雨空を鈍く反射させ乍ら手に持つて居る空の硝子壺を見て居た。

「もういゝ。ちやあ」

とよが、詫びを云ひさうにした。とよの責任でないのは分つて居た。伸子は急いで顔洗ひに去つた。

——伸子はあの穂藻が好きであつた。珍しいその藻の生活状態を、坂部から説明されたからばかりでなく、形も色も愛らしいものであつた。佃が誰かゝら貰つたものだつたら、さうむざ／＼棄てなかつたらう。伸子はさう思ふと惜しい氣がし、命ある穂藻が哀れにさへ感じられた。昨夜彼はそんなことは一言も云はなかつた。佃子が坂部に、穂藻の怪しくなつて來たことを話して居たのに。

二時過、伸子は家を出て丸善へ行つた。昨夜、坂部が、今日丸善へ参考書を注文しに行くと言ふ話が出た。

「丸善——私も何か見に行きたいな」
すると、佃が云つた。

「行くなら、こないだ送つて貰つた中に返すのがあるからとり来いと、杉君に云つて下さい」
出かける迄逡巡のことが伸子の心にこだはつて居た。彼が故意と棄てたとはつきり分るのが實にいやであつた。彼女は暫く躊躇した。けれども考へて居るうちに、彼女は拘泥して居る自分が腹立たしくなつて来た。彼女はとよに、

「おかへりになつたら、丸善で坂部さんと何かあげるものを見つけてから、動坂へ行つたと申上げておくれ」
と云つて出た。

丸善の二階へ昇つて行つて見ると、坂部はもう数冊の本を選り出し、番頭と何か話して居るところであつた。伸子は先づ夫の傳言を果した。坂部は植物學を通俗的に書きたい、本を伸子に示した。

「——かういふ風な書き方は、我々大いに學ぶ必要があると思ふが、どうです」

「植物の生活」フアブルが子供の爲に書いた著作にどこか似た文章であつた。伸子は、別な棚で自分の欲しいものを見たが無かつた。坂部が航海中讀むようにと一冊の本を買ひ、一時間程で丸善を出た。朝からの小降雨はまだやまなかつた。全市が一枚の濡れた大外套のやうだ。それから、濕つぽい、ねばつく霧が立つて、遠方の高い建築物をぼやかして見せた。傘を擴げたなり高くかゝけて、向うから來る人のと衝突するのを避け乍ら、坂部が、

「さて、どうします」

と伸子に尋ねた。

「いやなお天気ね——これでは歩く氣もしないわね」

「どちらへ歸りますか？」

「私？ 今日はお勤坂」

「ではお茶でも飲んでお別れしようか」

彼等は、ある家族的喫茶店へ入つた。坂部はいつも話好きだが、其日は特に話題が盡きなかつた。彼がいつか書きたいと思つて居る、さつきに植物學のやうな本のこと。今度の南洋旅行で、附屬的な收穫としたい或人類學上の興味ある計畫について。伸子が坂部と話していつも面白いと思ふのは、彼が

一種総合的な天質を發露させて植物學に携つて居る點であつた。彼が變形菌のことを話せば、必ずそれはどこかで今日の生きて居る人間の社會生活と關係を持つ結論に達した。檢微鏡的報告に終らなかつた。そこに彼の話の活々さと魅力があつた。喋つてゐるうちに、ぱつと、店内の電燈がついた。大理石の卓や、鏡を嵌めこんだ柱が、俄に夜の銀座らしく輝き出した。

「——さあ、そろ／＼動き出させようか」

「あゝ大分今日は喋りましたね」

坂部は時計を見た。

「何時？四時すぎたでせう」

「甘分です」

彼は勘定をし乍ら、考へて居たが、

「どうです、どうせ食べなければならぬものだから、夕飯を近所ですませませんか」

伸子は、「さうね」と云つたが、

「——かうなさいな、若し貴方が明日立つのに一人ぼつちであがるのお厭だつたら、動坂へいらつしやい。今日は父も歸る日だから丁度いゝわ」

坂部は、伸子の心持を理解したらしく、

「——成程」

と云つた。

「佐々さんにお目にかゝるのも愉快だな、ではさう願はふか——突然でかまひませんか」

「いゝでせう。——よそへ行くよりよくてよ」

伸子は、動坂の家へ電話をかけた。

途中で、何かの話の端につけ、坂部は、

「——今日のことは——まあ云はん方がよからうな」

と獨語のやうに云つた。

「何のこと」

「いや、この間の様子でも、佃君は一種の病人ですよ、精神的に——。だから、病人には病人を扱ふ心掛が必要だらうと思ふ。つまり、聞かせる必要のないことまで聞かせるに及ぶまいといふのです」

其は不愉快な注意であつた。伸子は、坂部からそのやうな言葉は豫期しなかつた。

坂部の言葉は印象濃く、数日経つた後まで彼女を滅入らせた。坂部との遠慮無いつき合ひを、伸子は數年來安心して楽しんで来た。彼と話すことは面白く、刺戟された。彼も、伸子のやんちゃや知識慾をやを、楽しんで居たらしかつた。親しい年の差の多い叔父姓のやうないきさつで、極めて自然に彼が好きなのに、何だか警戒的にならざるを得なくなつた。毬藻をくれた者と、其を棄てた者との、男の本能が、香氣に甘たれて居た自分を挾んで暗黙の裡に對抗したのかと思ふと、伸子は佻しく感じた。自分は、何方につく者でもないのに……。

妙に寒い日が続いた。伸子は陽の工合を悪くしたので、猶元氣がなかつた。仕事がちつとも出来ず、彼女は、單衣の上から母の羽織を借着などし、家の中をうろついて暮した。

或日伸子は珍しく、今日こそ、と意氣こんだ氣持で床を出た。彼女は、紺緋の元祿袖の着物で、どたく／＼食堂に行つた。珍しく兩親が卓子に向つて居た。

「——お早うございます」

云ひかける伸子に向つて持つた新聞と一緒に手を振り、多計代が空虚に成つたやうな聲で云つた。「えらい事が出来たもんだね」

見ると、父も別の一枚を読み乍ら、いつにない表情で居る。伸子は、その肩越しに紙面を覗き込んだ。三段ぬきの大見出しが障に映ると、伸子は、頸から鳥肌立つやうな打撃を受けた。彼女は、そこに坐つてもう一枚を擴げ、一氣に讀んだ。讀む字はわかるのだが、字面から來るものが多すぎ、理性から溢れるといふ心持であつた。或尊敬されて居た文學者が或夫人と自殺した事件が報道されて居るのだ。伸子は讀みなほし乍ら、何とも云へぬ悲しみと畏怖で震へるやうになつて來た。口が利けなくなり、彼女はやつと物を云ひ出した兩親を置いて部屋を出た。

×氏は、四十歳を餘程越した上流出身の、教養と才能と同時に人間的敏感さを多分に持つた藝術家であつた。理想家で、愛妻を失つてから二人の兒の父とし、孤獨を守つて生活して居た。作品の詩趣と、その特殊な境遇が種々の方面に若い女性の崇拜者を作つたが、伸子はさういふ側からでなく、反對に、更に偉大な人及び藝術家として自分を完成させる爲、彼が激しく行つて居るらしい内面的争闘にひどく心を牽かれて居た。最近書かれた長篇が、伸子に多くさういふ點での暗示を與へて居た。彼女の理解した×氏は、この一二年間に、必ず運命的な轉向を藝術家上生活上にしなければならぬ時期に迫つて居たのだ。其處を、ぐんと！そしたら彼は第二の天から、第一の天へ昇り得るであらう。伸子は其時をどんなに心待ちにして居たであらう。伸子は藝術家の運命、特色ある性格と環境と

の喰み合ひを、よそごとと思へぬ年齢になつて居た。彼女は、待つて居た。そして、見て。——
その期待のたゞ中に、今日の報道が齎らされた。全然、夢想もしない形で、彼は飛んだ。上へか？
下へか？伸子が全心に感じ得ることは、その疑問に對する理知的な返事ではなくて、彼は左様した。
彼は偽りを云ふ人でない。さういふ恐ろしい確認ばかりであつた。事件には人を沈黙さす誠實の威力
があり、超人力の何ものかがある。それが伸子に苦しい。ひどく苦かつた。自分といふ、現在揺れて
居る弱い存在の根にまで響が傳つた。

伸子は、食事が出来なかつた。一日、感動に漂つて一人坐つて居た。その夜、努力したが眠れなかつた。涙が出る以上の緊張が精神を擱んだ。

告別式が翌日の午前にあつた。伸子は、父と共に連つた。白布の敷かれた上を祭壇の前まで進み、
夥しい白花に覆はれた裡の一枚の寫眞で再び故人の溫容に接すると、きのふ新聞を見た時と同じ、
それ以上の苦しさが新に彼女をしめつけた。「彼は飛んだ。上へか？ 下へか？」涙がこみ上げて
來た。外側の關係から見れば、彼女はそのやうに泣く程故人と近い者ではなかつた。式に列して居る
親族の前に、伸子は極りわるかつたがその涙を制することが出来なかつた。

電車が九段坂とお濠との間の狭い軌道を、のろ／＼ブレーキをかけて下り始めた。三分の一ばかり進んだ時、前方から、手に赤旗を持った男が小走りに駆けて来た。運轉手に向つて何か叫んだ。運轉手は、いそぎ両手で更に強くブレーキを締めた。電車はいやな軌みを立て乍ら、勾配の急な坂路の不安定な位置に停つた。

「何だ、どうしたんだ」

車掌が、下りて行つた。數人の男が、さわめいて窓から無理に前方を覗かうとした。

「爆破作業の爲、卅分停車いたしまアす」

「——なあんだ」

と、氣色ばんだ男達は當がはづれたやうに席に復した。

車内は、一時森とした。響てぼつ／＼と騒音が起つた。關東に大震災があつてから一ヶ月餘経つて居たが、東京人は、まだ當時の亢奮からすつかり回復して居なかつた。人は、寄り集ると火の手の工合だの逃げ路の相談などをせず居られなかつた餘勢で、お喋りになつて居た。

纏りない雑談が、見も知らぬ乗客同志の間に交はされ始めたが、中で一際高い嗶れ聲が伸子の注意を牽いた。其男は、明日公判のある甘粕の行爲を、日本男子の醜鑑だと極力賞揚して居るのであつた。ひどく挑戰的な憎々しい調子で、熾に社會主義者はどしく殺しちまへと云つて居た。露骨な故意とらしさを不快に感じるのは、伸子ばかりでないらしかつた。彼女の前に居た若者は、無視しようとしても耳に入る文句に焦々し、靴の爪先をばたく／＼やつて居たが、遂にくるりと窓の方を向いて濼を見下し乍ら、トラヴァアトウレを口笛で吹き出した。晴れた十月の午後の日光が、神田の平らな路路帯を照して居た。

「——ちえつ」

やがて立つて居る伸子の背後で、舌打ちをする音がした。

「たまんねえな、根が生えちやうぜ」

伸子は時計を見た。もう卅分は充分経つて居た。

「ドカンて云はないうちやあ何分経たうが立往生だよ。下りちやはうよ、何でもありやしねえや、たつた三帳場ぐれえ」

その後の空いた席に、彼女は腰かけた。後の高い煉瓦崖にじり／＼反射する秋日和で、日除け扉を下した其方側はむつとする。隣に、ネクタイなしでソフトカラアに穢れた夏服をつけた薄禿の男が居た。左の手に手帳を持ち、短い鉛筆の先を舐めては、文章の推稿をして居た。講談本でも讀むやうに節をつけて繰返し自分の書いた文をよんだ。

「一度肉體死スルヤ、其靈魂ハ、遊行シテ——遊行シテ……と」

そこで行つまり、更に始めから「ヒトタビ、ニクタイシスルヤ」飽きず反覆して居る。——反動主義の男は、相手が無いのでいつか靜になつた。

いきなり、ドドンと地を震はせて爆音が轟いた。電車の窓硝子が一どきにビリ、とした。「やつたな」

待ちくたびれ、ぼんやりして居た乗客は、俄に活氣づいて窓外を見た。半分焼け遣り、孤獨に突立つて居た煉瓦の大建築の残骸の横から、濛と黄色つぼい大きな煙が昇つた。續いてもう一つ爆音。悠々と立昇つた煙が、まだ棚曳いて居る前の煙と重々しく合した。煙が散ると、もう、先刻の高い煙

物は跡かた無くなつて居た。空の廣さ、日の輝きが異様にはつきり感じられた。雄大な雄しい光景であつた。

不圖、女の泣き乍ら物を云ふ聲が伸子を驚かした。気がつくつと、彼女の隣に、卅五六の寝た女房が包みを膝に抱へて腰かけて居た。ドドーンと爆音がした瞬間、その女は居たゞまれないやうにきよろつき、誰にといふ當もなく、

「こゝに居て大丈夫でせうか、ね、大丈夫なんでせうか」

と口走つた。その聲が、泣き乍ら唇を吸ひこんで喋るやうに響くのであつた。

「——皆さんが居らつしやるから大丈夫なんでせうか……」

然し、ドドーンと土煙が彼方に騰ると、彼女は再び怯えて自制を失つた。

「あゝ、本當に大丈夫なんでせうか——」

伸子は、自分まで悲しいやうな惨めな氣がした。

「大丈夫ですよ。あれは工兵が仕て居るんだから——安心なさい」

猶二十分以上待ち、電車はやつと走り出した。

伸子は勳坂へ古雑誌と衣類を貰ひに出かける途中であつた。彼女は直接震災に遭はなかつた。けれ

ども、廢墟になつたやうな大都會の光景が、強く彼女の心を撲つた。反動的な生活力が市民の總てを捕へた。彼女も、今まで失つて居た生存感の凝集を感じ、數人の女性と震災罹災者慰問の仕事に携つたりして居たのであつた。

結婚してから四年間、彼女の生活は内面的に、夫との組み打ちの連続であつた。ひどい機關の音ばかりする工場に四年働いた人間は、きつと鼓膜が變になつて、普通の物音など聞えないやうに成つて仕舞ふだらう。伸子の精神状態も全く危期にあつた。次第に緊張し張り切つて來る心の苦痛で、彼女は一種の偏執狂になりかけであつた。一人靜かに居る時、彼女は、この生活がいつまで續くかと云ふ恐怖の塊りであつた。もう涙など落ちず、冷靜と云へる程落付いて、如何うして此處から逃げ出さう。本當に、彼は自分で云ふやう、ちぎりに死ぬだらうか。死ぬと大變自然に片づいてよい。——そのやうに考へる。執念く、一日ちゆう飽きず、そのやうなことを思ひつゞけた。その癖、逃げるなら逃げる實行方法を計畫するかと云へば、伸子の精神からは、健全な意志が腐れ落ちたやうな有様であつた。彼女に決心といふものは殆ど何一つ出来なかつた。たゞ思ふ、思ふ。彼女は夢の裡でさへ、そのやうに思ひ惱んで居るまゝの自分をみた。

その夏、伸子は、佃に連れられて彼の故郷に行つて居た。二階を自分の部屋にして居たが、そこは二階と云つてもちやんとした部屋ではなく、謂はゞ屋根裏の物置であつた。廣い板の床の上に疊を五枚敷き並べ、彼女は其の隅に机を置いて暮した。三尺に一間の小窓があり、そこから大櫨の木の梢が見えた。その櫨の木に終日油蟬が鳴いた。一面の青田で、日中は一ふきの風も動かぬ、も一つと水蒸気の罩つた八月の曇さを、その蟬の聲は更に堪へ難くした。伸子は流れる汗を濡手拭にふきつゝ、病的な根氣で其日々を送つて居たのであつた。

計らず、震災は伸子を、そのやうな意志喪失からひどい力で搦き出した。驚きが、先づ彼女を確かりその足の上に立ち上らせた。次で、普遍的な生活の建てなほしの意氣が、彼女の心でも火を起す種となつた。——九月七日に、勸坂から赤坂まで徒歩で歸つた。途中、九段まで来て、来た方を顧みたま時、荒涼とした焼跡の東京が面をあげて伸子に迫つた。その感動を、彼女は忘れることが出来なかつた。

その秋、伸子は實感をもつて生命の能量を知りなほした。

二

十月の或朝、飯をしまふと、佃が、

「そこいらで壁に貼る紙を買つて来てくれませんか」と云つた。

赤坂の家は、地震の時處々の壁が落ちた。そのまゝ月が更つたのであつた。

「素人ぢや無理でせう、今になほしに來てよ」

「やつて仕舞ひませう——いつ來るか分らないんだから」

伸子は、何か指圖した色の紙と糊とを通りへ出て買つて來た。あぶなかしい經師屋が始まつた。疊の上に新聞紙をひろげ、伸子が糊をつけた紙をつまんで渡すと、椅子にのつた佃が壊れた壁に貼りつける。午前と午からちゆう其仕事をした。伸子は常からさういふ仕事は直き厭になる性分であつた。

「もう今日はこれだけにして置かない？」

彼女は一二度區切りに来た時云つた。佃は、先、庭へセメントの池を拵へた時もさうであつたが、働きを程々でやめるといふ事の出来ない人であつた。やり出すと、自分も傍の人間もうんざりし切るまで頑張つてやる。その時もその傳であつた。すると、敷石を靴で来る登音がした。伸子は糊刷毛を手持つたまゝ耳を澄した。

「——御免なさい」

伸子は、其聲を聞くと、糊をといてある丸盆を飛び越えて玄關へ出た。

「姉さん居る？」

「居るとも！」

「やあ——今日は」

和一郎が来たのであつた。和一郎は九月一日に小田原から鎌倉へ行き、五日まで生死不明であつた。中甸になつて、やつと軍艦で歸京した。赤坂へはそれから初めてであつた。

「——大變なのね、上つてもいゝ？」

「まあまあ、いゝとも——和一郎さんが来たのよ」

と、伸子は働いて居る夫に聲をかけた。和一郎は、伸子の後について、一杯とり散らした新聞紙をよけ、爪先立つて奥の座敷へ入つて来た。

「今日は——」

「いらつしやう」

佃は、和一郎に背中を向けて椅子の上立つたまま、一言挨拶したぎりであつた。——伸子は、感じたものがあり、和一郎を隣の部屋につれ込んだ。

「お茶が入つてよ、いらつしやらない？」

「私はいりません」

時々夫の様子を見に行つては、伸子は和一郎と久しぶりでもろく喋つた。何といふことなく話しはつきす、彼が訪ねて呉れたのは嬉しい。佃が壁貼りをやめて、せめて、茶の一杯も仲間に入つて飲んでくれたらどんなに和一郎も自分もくつろげるだらうかと、伸子は残念に思つた。佃が働いて居るといふ意識が彼等の楽しさを曇らした。やがて佃は、脇の下へ紙の巻いたのを挟み、上に糊盆をのせた踏臺を持つて、彼等の居る六疊へ入つて来た。

「一寸どいて下さい、ついでにこゝもやつてしまひたいから」

「——本當にもうおやめにして悠くりませうよ、ね？ 折角和一郎も来たんだから」
伸子にすれば、今日一日壁から風が入る位平氣なのであつた。けれども、自分は、自分で茶盆などを片よせて、新聞をひろげ始めた。

仕方なく、彼等は、

「さあ逃げ出し〜」

と、今度は茶の間へ行つた。和一郎は椅子にかけて居る。境の障子をあけて話し乍ら、伸子は臺所で働き出した。弟が無事であつた心祝ひのつもりが彼女にはあるのであつた。

「何か注文ないこと？ 今日少し御馳走してもいゝわ」

「素敵だな——何でもいゝや」

「玄米でげつそりして居たんでしょ」

「うん、もう平氣。——僕ね、一緒に食べさへすりやいゝんだから、餘り姉さん心配しない方がいゝや。一人で大變だもん」

「何にしよう、この邊ちつとも美味しいものなんぞないのよ」

ところが、何が入つて来た。が今度は改めて隣りもなく、彼は片端からどし〜黄色い壁を落した

した。和一郎は黙つて立ち、八疊へ行つたが、其處も聲に新聞が敷き散らされて居たので、彼はやむなく椅子を核側に出したらしい。臺所と茶の間の境の敷居の上に佇んで、何の喧嘩ごしな様子を見上げ、伸子は夫の氣持を推察するに苦しんだ。何は、和一郎にまでやつ當りするどんな理由を持つて居るのだらう。伸子は不本意であつた。

「こゝは私いつか自分でするから今日はやめて下さらない？ 家ちゆう、御飯たべる所も無くなつてしまふから」

「御飯なんかまだ食べませんよ」

彼女は思はずむつとしたが、和一郎に聞かせたくなく、きつく踏臺に乗つて立つて居る何の洋袴のポケットの處を引ばつた。

「なんです？」

伸子は、夫の耳に仰向き、小聲で、

「ね私、今日和一郎に悠くり御飯をたべさせてやりたいのよ。歸つて始めて来てくれたんだから。——お願ひ、ね？」

何は躊躇する氣色だつたが、再びくるりと壁に向つて立ちなほつた。そして伸子の唾に答へる代

り、高く聞えよがしに獨言した。

「——いつも食べるばかりに來たつて何にもなりやしない！」

伸子はやつと堪へた。憎悪と涙が心に溢れた。彼が反感から、——伸子が佃より弟をちやほやするところに對する反感か、或は和一郎の氣兼ねをしない親しさを曲解した反感からか、わざと部屋々々を引きちらかし、和一郎と彼女に落付く場所も失はせるのだと感ぜずに居られないやうになつた。和一郎迄何故其様に扱はれなければならぬのか。佃の背中を睨みつけ立つて居ると、やゝ荒々しい聲音で和一郎が八疊から出て來た。

「僕歸る」

伸子は、喉がつかまつたやうで返事が出なかつた。

「……………」

「飯なんぞいるもんか！」

和一郎は帽子かけから帽子をとつて被り、靴をはき始めた。伸子の前には和一郎がこゝんで居る。直ぐ左の柱はづれに、踏臺に踏みひろがつた、佃の二本の脚が見えた。伸子は、どうして呉れる、といきなりその脚を拂つて引くりかへしてやりたい激情を覺えた。靴をはき終り、和一郎は、伸子を見

て、

「左様なら」

と云つた。もうそれは七時近くであつた。實に堪へ難く、彼女はやつと云つた。

「又ね、ぢやあ。——御免なさい」

格子が彼の後にしまると、伸子は涙が出て仕方なかつた。和一郎が若しか金を持つて居なかつたらと思ふと伸子は猶堪らない心持になつた。彼女は踏臺から佃を無理やり引すり下した。彼女は熱し云ひ争つた。佃はさうなると、例によつて、

「其那氣ぢやあなかつた」

の一手で伸子が疲れ切るまで己を守つた。

——其時のことを後から思ひ出すと、伸子は佃の心の寂しさ、自分の寥しさが心に迫るのを感じた。伸子は自分の悲しみや、怒りが間違ひであつたとは思はなかつた。たゞ自分の氣持の一重底に流れて居るもの。それが寥しい。それは、いつの間にか自分には夫の佃より、再び血族の父や弟の方が可愛く大切になつて居るといふ、新たな自覺であつた。

四年前、彼等の戀愛の初め、結婚しやうとする時、如何那に自分が兩親其他に反抗したか追懐がは

つきり伸子の心に浮んだ。彼女はその頃、血に傳る種々な傳統に形と精神とで反抗し、自分だけは別種な、もつと自由なもつと確固とした生存になりたいといふ大望を抱いて居た。段々結婚といふ接木が不成功であることの證明された今、又自ら血が血をよんで自分は血族の裡に牽きつけられようとするのであらうか。本能の不思議な力。然し、伸子には、努力して出て来た處へ再び舞ひ戻らない信念はあつた。蛇はどんなに傷ついてももう去年のぬけ殻へ、二度と入つて行くことは出来ない。……

三

年が更つた。

四月に入つてから、或る日、伸子は檜崎の書齋で喋つて居た。書齋の窓から田端の高臺が見晴らされた。數日來風が強く、やつと其日和いだ日光と風景であつた。

「跳めが變つたことね、この前上つた時分から見ると——」

「さうでせうとも。もうすつかり春ですよ」

佐保子は正面の椅子から立ち上つた。そして伸子に横顔を向け、硝子の外を覗いた。

「木蓮どうしちやつたかしら——この間ぢゆう、彼方の部屋に坐つて居るとそれは綺麗でしたよ、早く来れば見られたのに」

東ね髪だが、蟬谷のところでは鬢の毛が張り出し、古典的な横顔に美しい趣を添へて居た。やゝあり、伸子が云つた。

「——でも貴女は一種の力をもつてゐらつしやるのね」

「ほ、ほ、ほ、」

佐保子は特徴ある笑聲を立て乍ら、又元の場所へ戻つて来た。

「大變なことになつたのね」

「でも左様思ふわ、兎に角あなたのところへは、ぐうたらな氣持のまんまでは上れないやうな處があるわ」

「窮屈なのよ世間知らずだから。——私それは間抜けなんだもの」

佐保子は伸子より十幾歳か年長で、文學上の先輩であつた。女學校の四五年時分から伸子は彼女の

制作に親しんで居た。自分が此から進まうとする道に既に踏み出して居る先達、さういふ意味で尊敬と刺戟を感じつゝ數年経た。ところが偶然の機會から交際が始つた。互のよいところで鼓舞し、仕事で勵み合ふといふ種類の友愛が醸された。佐保子が永年の間種々の困難や苦痛と黙つて闘ひつゝ、怠まず藝術を研いて行かうとする努力の姿は、伸子にとつて少なからず藥であつた。結婚してから生活ががた／＼になり、何にも出来ない時心が愚痴で漲つても、伸子は佐保子に其を逆も訴へ得なかつた。佐保子をもつと辛さを知つて居るかも知れぬ。其をあのやうに確り堪へてやつて行くではないか。さう思ふのであつた。

話のつゞきで、部分的にさういふ心持を告げると、佐保子は、

「あなたなんか買ひかぶるのよ」

と、しんみり笑つた。

「——でもね、今は私或程度まで生活といふものを客観的に見て落付けるやうになつたけれど、斯うなる迄には昔持つて居たよいものも澤山失つたわ。——人間といふものは一つ得る爲には何か他の一つを犠牲にしなければならぬものなのね」

佐保子は、その頃ロシアの貴族出身で、十九世紀末歐洲で最も尊敬された女流數學者、並に作家で

あつた或女性の傳記を翻譯して居た。

「どうなすつて翻譯——おすみになつて？」

「あゝ、もう直き出ますよ、出たら是非讀んで下さい。私がソーニヤを愛さずに居られないわけがわかりますよ。本當に我等の女性といふ氣がしてよ」

扉をノックする音がした。

「はい、お入り」

若い女中が、伸子に挨拶し、取次いだ。

「吉見さんがいらつしやいました」

「まあ」

佐保子は椅子の上で體を揺るやうにし、伸子を顧みた。

「珍しい人が見えたこと、今日はいゝ日ね、好きなお客さんばかりあつて。——伸子さんかまはないでしよう？」

「——」

吉見といふ人が女か男かさへ見當つかず、伸子はぼんやり、

「どうぞ」と云つた。

「ちやあこちらへ。そして美味しくお茶を入れて来て下さい」女中が扉をしめて去ると、佐保子は、やゝ蒼白い皮膚の下から悦びが照り出すやうな表情で、伸子に説明した。

「私の古い／＼お友達なのよ、一寸變つたところがあるけれども、それは心が清い人、率直で。——やつぱり一年に何度といふ位しか来てくれないけれど、貴女にもきつとい／＼お友達ですよ」

直ぐ階段に足音がした。ノック。扉が開き、好奇心と期待とを佐保子の言葉から感じた伸子の前に一人の女が現れた。

「こんにちは」
「今も悪くちを云つて居たところよ、あなたが稀にしか来てくれないつて」

「あなたの方がもつとひどいぢやありませんか、こないだ来てくれたのが始めてだもの」
二人の話しぶりには、伸子と佐保子との間にある氣分と異つたものがあり、伸子は思はず微笑して、

「御紹介させよう、佐々伸子さん、こちらは吉見素子さん、お父さんの腹かちりのいゝ身分の人です」

「よ」

素子は、
「變な紹介だな」

と云ひ、苦笑した。
「これでも食ふだけは自分でどうにかして居ますよ」

「——×××の編輯をして居なさるのよ」
伸子は、思はず素子の顔を見た。我儘つ子らしい、感情家で勝ち氣なところがあるらしい素子の第一印象と、彼女が一度だか見たことのあるその時代にすてられたやうな或團體の機關雜誌とは、凡そ

かけはなれたものに感じられた。素子はてれたやうに、
「いやんなつちやうな」

と、赧くなつて笑つた。伸子も笑ひ出した。赧くなつた素子の衰形の小麥色の肌理の滑らかな顔付に、
ひどく稚い純な魅力を感じた。

「——あれ、全く詰らない雑誌ね」
「えゝ。金をかけないんだから逆もいゝものは出来ないんです、潰した方がいゝんだけれど……」

大阪館をたべ乍ら、佐保子が云つた。

「私ね、そりや出不精で不忠實な友人なんだけど、この間不圖吉見さんの家を訪ねたのよ。そしたら、この人は、大きな〜實に堂々たる机の上に山ほど物をつみ上げて、ほんのこれぼつちの」

両手で、五六寸の幅を拵へた。

「隙間で何かして居るんですもの。——滑稽な人ね、あの落付く二階へ彼那立派な調度があれば、私だつたらそりや勉強して見せるわ」

「二階を借りてらつしやるの？」

「——」

素子が口を開かない先、佐保子が教へた。

「いゝえ、ちやんと一軒占領して居るのよ、自分は二階へ納つて下に夫婦を置いて居なさるの」

「いゝのね、羨しい位だわ」

「御覽なさい、伸子さんでさへさう云ふですよ。何と辯解したつて、いゝ身分なのですよ」

素子が着物や帯、細々した細などを或趣味で選び、身につけて居ることが一目でわかつた。このやうな服装の出来る、そして専門は露西亞文學の、獨りで一軒の家の主人となつて自由に暮して居られ

る女性の生活が、伸子にはひどく悠々独立的なものに想像された。

五時頃、佐保子が、

「伸子さん悠くり出来るんでせう」と訊いた。

「えゝ、今日はすつかり楽しむ積りなの」

「では、皆で自笑軒へでも行きませう、父さんの都合を一寸訊いて見て」

先へ出かけることになり、三人は、昔風な植木屋などの未だ残つて居る夕暮の田端の通りを、茶料理までぶら〜歩いた。途中、或寺を通り抜けた。素子が、

「こゝを雪の朝通つたことがありますよ、あなたのところへ泊つた朝早く」と邊を見廻した。

「さう〜いゝ雪見をしたつて、——五時頃ぢやなかつたの？私びつくりしましたよ、餘り早くかへつてしまふんだもの」

自笑軒で、奥の茶室に通された。伸子は地震後は初めてとあつた。壁など處々痛んでは居たが、隅に貼りまぜの小屏風などを置いた部屋の様子は悪くなかつた。三十分程遅れて、檜崎も來た。

「もう暗くて見えないかな、多分この庭の奥に何か祭つてあつた筈だが——」
大観（多分）が月の好い晩この家で酔ひ、興にのつて低い白土塀に墨繪の竹を描いたとかいふ庭
が彼方にあつた。

酒を飲む人がないので食事は直きすんだ。殆どあつけない位であつた。

「たゞむしやく／＼食ふのは何だか不風流で手持無沙汰なもんだな」

「いやに、又拗らせるんですね」

皆笑つた。

歸り、玄關から暗い門までの飛石を、女中が先に立ち雪洞で足元を照した。

又田端の通りを、今度は停留場の方まで四人一列になつて歩いた。人通りがなく、少しの風が出て、

呉服屋の轍がはためいて居た。伸子は萬世橋まで素子と一緒に電車で行つた。伸子は赤坂へ、素子は
牛込に歸つた。

四

十日餅り、伸子はいゝ季節なのに拘らず、引籠つて暮した。榎崎へ遊びに行つた前日、一通り書き
上げた小説を書きなほして居たのだが、伸子は仕事の快感を餘り樂しめなかつた。書き足りない氣持、
心全體が流露し切つて居ない意識、——従つて、自分の本當の內的な發育の上には大して意味のない
作品といふ氣が書終ると強く遣つた。伸子は、其小説で、ほんの端つぽを掠め、技巧的に曖昧に自分
の結婚生活の内部に觸れた。書き上げて見ると、伸子は種々自分の虚榮心や綺麗ごと好きな弱い根性
やに心付いた。細君として實際自分が泥濘でばた／＼やつて居る間は、逆も素直に、自身陥つて居る
泥の穢さ、自分の馬鹿さなど自分に向つても承認し得ない、女らしい小さい意地が突張るのを感じた
のであつた。

一蹴りきつく地面を蹴つて、海に躍り入るやうに仕事の内に飛び込み、頭から足から揉まれ洗はれ、
すつきり更新した自分に成りたい慾望が、却つて伸子の内に激しく募つた。心が離れきつて居る側と
殆ど形だけ夫婦らしくして居るのも、伸子は、つまり自分の卑怯さからだとも明に感じるやうに成つた。
これまで彼女は自分のそのやうに不決斷な氣持を、愛すべき未練や、彼を最小限に傷つけてすむ方法

を見出したいと思ふ幾分の好意に原因して居るやうに思はぬでもなかつた。今考へると、然しそれも、主我的なものを含んで居ると思はれた。つまり、自分は出来るだけ氣樂に、安當な理由をつけ、彼からも他の周囲からも、餘り悪い子と思はれないで目的を達したいといふ、虫のよい魂膽があつたのではなかつたらうか？ 佢が自分にとつてどのやうに不満な夫であるかを説明するより、伸子自身先づ私はもう彼が愛せない、どうしても妻であるのは厭だ。と宣明する勇氣だけが必要なのだ。どんなに嫌されても、忠實な彼の妻として生涯を過せないのである以上、そしてそれを自分で評價し信じて居る以上、何故、憎まれても、エゴイストと云はれても泰然たる覺悟をしないか。——自分の内に、佢の受けるだらう同情(世俗的なもの)と判り、本當の價値は認めない癖に)に對する嫉妬が在るらしく、其を思ふと伸子は我を卑んだ。

ふらりと其處へ素子が、訪ねて來た。伸子は意外な、嬉しさを感じた。先夜、近いうちに行きませう、訪ねませうと別れたのであつたが、素子が約束を、さう早く果さうとは思つて居なかつた。

「——やつぱり先を越されたわね」

「不精なんです、あなたも……」

「ひどいの」

上りながら、素子が、

「いそがしいんですか」

と訊いた。

「もう暇よ」

「少し出ませんか、若しよかつたら散歩に誘はうと思つて來ただけけれど」

伸子は素子に待つて貰ひ、仕度をして家を出た。日傘なしでは眩しい位快晴であつた。二人は晝飯前であつたので、始め銀座に行つた。軽い食事をすませ、素子が用事のあるK新聞によつてから、帝國ホテルの横を通つて日比谷公園に入つた。

「日比谷は珍しいわ、何年來ないかしら……」

素子が吃驚したやうに聞き咎めた。

「——其那に出ないんですか？」

「此那とて、一人でてくく歩いたつて仕様がないうやうなものぢやないの」

内幸町から入る門の附近には、まだバラツクが大通りの樹陰に軒を並べて居た。食物ばかり賣る店が續いて居た。「一寸一杯酒肴アリ」立看板がある。汁粉雜煮、ワントン屋。汚水を流す溝や不完全

な炊事場から蒸れ臭い不健全な臭気が、塵埃で白くぼくなくなった春の並木道に漂つて居た。伸子がよく子供の時分、大きなリボンをつけて遊びに来た瓢箪池の傍に出た。葉の青々した籐懸の下に池に向つて空いたベンチが一つあつた。いゝ加減歩いた彼女等は其處にかけた。

「もう傘なしぢや無理だな、あついでせう」

素子は持つて居た雑誌で扇を使ふやうにした。

「でもいゝ氣持だわ、——鴨がまるで愉快さうよ、御覽なさい」

バラツクがある故か、日曜でもないのに四邊は割合人出であつた。青色の労働服や法被姿の男が多かつた。彼等は煙草を吸つたり、新聞を見たりし乍ら、池の周囲のベンチ、鐵柵の上などに休んで居る。地震の時、水禽を獲つて食べて仕舞つたといふ話の池には、今日水がなみくくと漣立つて居た。キラ／＼日光が揺れる。水面上に二羽の鴨が盛に游泳して居た。彼等は時々、急に卵色の蹼が見える程伸び上つて威勢よく羽搦きした。水がバシヤ／＼散る。水の重吹の上に、瞬間低い小さい虹がぼんやり立つた。無心な、熱っぽい、美しい様子であつた。

直ぐ傍に印符纏の男が居たが、伸子は寛ろいだいゝ心持でいろ／＼素子と話した。多くの場合、伸子が切り出す廻り行せになつた。チエホフのこと、西鶴のこと、金槐集のこと。金槐集は最近に讀み、

「一寸——私さつきから間違へて居やしなかつて？」

「名ですか？」

「タメトモつて云ひやしなかつたこと？ 一度か二度——」

素子は、はははと笑ひ出した。

「何だか變だと思つた！」

「皮肉やね、黙つてにや／＼して居るなんて法はないわ」

自分も笑ひ出したが、伸子は極りわるく感じ、少し縮くなつた。

「——本當に、あなたが云つたんで、あゝさうかと思つたんですよ、どつち道話は分るからいゝぢやありませんか、名なんぞ」

思ひ出すと、二人でこの失策を笑ひ／＼、彼女等はそのベンチに二時間ばかり居た。

「あなたはどうか？ 私ね、散歩しても同じ路を往きも歸りも通るのが大嫌ひですよ、どうにかして別の路を歩かないぢやあ氣がすまない」

櫻田門の方へ抜ける道を歩き乍ら、素子がさう云つた。其那好みのはつきりして居るところ、いかにも素子らしく、伸子は面白いと思つた。

櫻田門で電車を待つたが、なか／＼来ない。間もなく日比谷の交叉點に故障があることがわかつた。西日が、からりと打ち開いた廣場を照し、停留場に待つて居る人物の輪郭が小さく見える。其處から、濠を傳つて彼女達は三宅坂まで歩いた。柳の下を歩いて居た間、日比谷の方から追抜く電車は一臺も来なかつた。

伸子はその散歩でも、少なからず元氣づけられた自分を感じた。

五

伸子は或日動坂へ行つた。母は留守であつた。彼女は其を知ると、庭木戸から隠居所の椽側に廻つた。針箱が出て居るが、祖母の姿は其邊に見えなかつた。

「お祖母さま」

一聲ばかり呼ぶと、臺所から祖母が、

「誰だあ、つや子か、あがれ」

と云ひ乍ら出て来た。針箱の前に、もう上りこんで居る伸子を見出すと、彼女は一寸亢奮し、

「お前かしふア」

と笑つた。

「いつ来た？おつかさん生憎出かけたごんだ」

「今日はお祖母さまに用があつたの」

「さあ、おしき」

祖母は、自分が喜の字の祝の時貰つた厚い綴子の座布団を火鉢の向ふ側に置いた。

「おら、きのふ須田から歸つて来たばかりだごんだ。――あすこでもはあ、これから何じよにして行くか困つたもんだなあ、考へておら昨夜睡れなかつたごんだ」

祖母の二番娘、伸子の叔母が須田の細君であつたが、地震の時壓死した。あと總領の女學校を出たばかりの娘が世話を焼いて居るのであつた。

「——仕方ないから、家政婦でも置くのね」

祖母は其に答へず、樂の茶飲茶碗を兩手の間に捧げるやうに持ち、一口啜り、

「おら、地震この方、只さへ毫碌して居たのが猶更毫碌したごんだ。お静には死なれるし、保科は死

ぬし……何しておらのやうな在り甲斐なしがいつまでも死なまいかと思ふ」

去年の九月、祖母は東京で、目のあたり血をわけた娘や弟の死を経験したのだ。伸子は、哀れに感

じて述懐を聞いた。

「そろ／＼時候もよくなつたから、御祖母さまKで悠くりしにいらつしつたらどう？」

「さうよなあ、見に行かなけりや草屋にして置くなあ」

「私近くに行きたいから、一緒にいらつしやらない？」

意外さうに、祖母は伸子を見た。

「ほんとうか？ お前が行くならおらも行きたいごんだ」

「私もいゝわ。お祖母さま、いつがよくて」

「今日でなければ、おらいつでもいゝが——」

祖母は、急に年寄らしい氣ぜはしさで煙管をはたき乍ら、聞いた。

「——家の方はなじよにする？——佃さんにお訊きしたのか、お前」

「それはいゝのよ」

伸子は祖母の心配を遮る爲、簡単に軽く答へた。

「私、來月早々立ちたいから、ぢやお祖母様そのお積りでいらして頂戴」

頸に力を入れ、確り合點しつゝ、満足さうに祖母は、

「よし」

と答へた。

母の歸るのを待たず、伸子は家を出た。停留場の傍にメリンス屋があり、店頭には正札つきの友禪を

吊つて賣つて居る中に、一つ目についた柄があつた。價もやすい。思ひ立つて、伸子は其を一丈切ら

せた。彼女は遠くから華やかな臍脂の模様を見て居るうち、田舎の家では、夜具の肩當も座布団も、

何も彼も茶と黒づくめの色彩なを思ひ起したのであつた。

佃が、伸子より少し前に歸宅して居た。彼は、顔を見ると直ぐ、

「勤坂へ行つたんだつて？」

と訊いた。

「ええ」
「電話でもかかったの」

「いゝえ、さうぢやなかつたけど——誘ひに行つたのよ、お祖母さまを」

「——へえ……」

「私又Kへ行きたいから誘ひに行つたの」

佃は厭な顔をして黙り、此方向いて居た顔を机の方に振つた。行つてもよくて？或は、ね、いゝでせう？と自分が云ふのを待つて居る夫の期待を感じたが、伸子は意識して沈黙を守つた。伸子の心に、捨身になつた結果生じた餘裕のやうなものがあるのであつた。

暫くして、佃が露骨に喧嘩つばい調子で詰問した。

「——氣を換へに行くんですか、それとも別れる爲に行くんですか——此方にも都合があるから聞かせて下さい」

語氣は激しいやうであつたが、其を本氣の本氣で佃が云つて居るのではないことを伸子は直覺した。これまで、いつも自分が間抜けに佃のいふ言葉を最大限に受け、其場で結着をつけようとした爲失敗ばかりした。伸子は其に氣付き、妙な笑を浮べ乍ら逆に訊いた。

「貴方はどうお思ひになるの？」

佃は、自分からは何方と見當をつける冒険を敢てしきれず、憎しみをこめて横目で伸子を睨んだ。其顔を見ると恐怖の代り、彼女自身を愕かして、切れくゝな軽い意地悪な嘖ひが勃發した。彼女は毒毒しいところのある優しい聲で悠くり云つた。

「——憎らしい？」

佃は體の何處かを突刺されたやうな恐しい表情をした。夫の苦しみが伸子の魂に焙りついた。あゝ、彼は苦しいのだ。苦しいのだ。然し、伸子は夫と自分とを刻む苦痛に酔つたやうになつて、口許に凍つた微笑を漂はせ乍ら、さも好いことでも告げるやうに、一言々々はつきり、

「私も憎らしくつて憎らしくつて堪らないのよ、貴方が………食はれて居るやうな心持」と嘔いた。むせ返るやうに、佃に對する憎悪と自己嫌惡がこみ上げて來た。伸子は目の前が暗く成るやうな心持で部屋を去つた。

七日か八日にKに出發する豫定であつた。佃は例の如く毎日學校へ出てゆき、夕刻かへると、見ぬやうにして必ず其となく部屋の様子をうかがつた。伸子が旅行の仕度を今日にしたか、如何那にしたか、と思つて、彼は歸つて來るのであらう。段々日は近づくのに、何一つせぬ彼女を待切れなくなつた彼は、

或日、

「本當に行くんなら仕度したらいいでせう」

と、氣を引くやうに云つた。佝がさり氣なく、然し荷物はどんなかと思ひ乍ら我家に歸る氣持を感じ
る丈で、伸子は既にいゝ加減參つて居るのであつた。彼女には、業々しく仕度するだけの元氣がな
つた。伸子は憤つたやうに、

「騒ぐほどのものはいらないのよ、私のことだから」

と、ぶつきら棒に答へた。ぼんやりと主婦が居なくなることを知つた女中が、教育のある物わりの
よい女であつたに拘らず、何だか落付かなさうに、心の不安を隠して働いて居るのも伸子には辛かつ
た。一つの家庭が潰れようとする前の、壓迫的な解體的な雰圍氣。――

愈々明日立つ筈といふ前日、伸子は十時頃目を覺した。彼女は床の上に起きなほつたまゝ、暫く空
になつて居るもう一つの床や硝子から見える狭い庭、竹垣などを眺めて居た。隣りの細君がその言葉
だけはつきり、

「又この頃ちや小紋流行ですわね」

と喋つて居る、高い粗野な聲、朝の疊のひつそりした感觸などが、異様に鮮かな重みをもつて伸子の

心に寫つた。總て見馴れて居るものだ。總てを最後に見るといふ氣がした。この疊の上で朝目を覺した
時「あゝまだこゝに居るのか」と云ひ難い苦惱を感じたのは幾度であつたらう。生活は不思議なもの
だと伸子は思つた。其處が自分の苦しんだところだといふばかりに、先づ家からさへ去り難い思ひを
させられる。何でもなく竹垣の根元の萬年青などが印象の眞正面に立つた。――伸子は、夫の居ない
時、一人靜に家を出て行くつもりなのであつた。本當に！自分の持つて生れたよいところ、わるいと
ころ、全存在を傾けつくして愛し憎んだ佝であつて見れば、不圖思ひ出した石ころ一つにも繋つて、
彼が或時斯う云つた聲、あゝ自分を視た眼付が思ひ出せようではないか。佝も其と同様に、自分の細
かい事まで思ひ出すであらうと思ふと、伸子は、一瞬に互の五年の生活がたゞまつて自分にのしかゝ
つて来るやうな息苦しさを感じた。

紅茶とトウストを食べると、伸子は卓子を立ち乍ら女中を呼んだ。

「一寸――納戸にある靴ね、あれを出して掃除して頂戴」

「お立ちでございませうか？」

「あゝ。今日から勳坂へ行つて居ないと都合がわるいから」

椽側へスウト・ケイスを出し艶布巾をかける。傍で、伸子は机の上から日記その他必要の文房具をま

とめた。ほんの着換の袷、セル等をつめた上に、原稿紙をのせた。

「お荷物これだけでよろしいんでございますか」

「——ちつと要れば云つてよこすわ、送つて呉れるわね」

「え、そりや——」

云ひ難さうにし乍ら彼女は尋ねた。

「大抵いつ頃お歸りになりますでせう」

「歸らなかつたら困る？」

と云つて、伸子はふさげのやうに一寸笑つた。

俤を呼ばせた。荷物だけ乗せて動坂へやつた。スウト・ケイスが小さいので、俤に其を幾重にも括

りつけた細引の方が目立つやうであつた。

俤が歸らないうちに掛けて仕舞ふことはさすがに躊躇された。伸子は悲しく揺れる心で三時過ぎ

で愚圖々々して居た。が、聽て彼があゝの聲と眼ともつて、これ迄の毎日通り格子を開けて来るだら

うと思ふと、彼女は急に家を出る氣になつた。

「ぢやどうぞ氣をつけてね」

表通りへ出るまで、左右生垣つゞきの横通りが二丁ばかりあつた。そこを帛紗包みを抱へて歩き乍ら、伸子は背後が氣になり、我知らず急ぎ足になる厭な氣持を経験した。通りはずつと眞直、彼方の大通り迄直角に續いて居た。伸子等の家も在る長方形の一區麻を凹形に圍んで居るのであつた。俤が勤め先から歸る路は定つて居た。凹形の右の道をすつと來て煙草屋の角を左へ、今伸子が歩いて居る横通りへ曲つて來るのだ。いつも人通り少い細道であつたから、彼が角を曲れば、遠くからでも伸子の後姿は見えるわけであつた。何かの都合で彼がいつもより卅分早く戻り、あの角を曲つた拍子に自分を見はしまいか。後から速足で來たり、口笛をふいたりしはしまいか。——俤は今日、伸子がいづれにせよ出掛けることは承知であつた。それなのに、何故此那に逃げる者の感情が自分につよいのか。自分に反抗し、努めて苦しい位悠くり小砂利を敷いた道を歩き乍ら、伸子は、人にも話せない感情だと思ひ、苦い涙が眼に浮んだ。

六

田舎に着いた日、其地方は五月の嵐つばい天候であつた。俵に乗つて市から村へ通じる寂しい一本道にかゝると、荒い幅廣い風が幾里も先の山脈からその一筋道に吹き下した。幌がドーツと一陣風を孕むと、俵夫は棍棒に體全體の重量をかけ、しがみついて立ち漕ぐ。さういふ瞬間、伸子は夕暮の正面に一本ぼんやり白く横はる道と、黒い嵐雲の捲き立つ空が山際のところでだけ物凄く藍色に光つて居るのを、まじく／＼と見た。情熱的な暗い不安な空模様が、彼女の心の状態の反映のやうであつた。祖母は、毎日竹箴をこいだり、納屋へ入つたりして働き廻つた。そして、種々見え無いものを發見し、家ちゆうの騒ぎを惹き起した。

「一寸畑さ行つて與次郎が居たらよんで来てくんなら」

與次郎が椽側に廻ると、祖母は爐ぶちで煙管をはたき乍ら、

「お前、茶壺しらねえか？ 島根に居た頃、出入りの大工で茶人が居て、これへ茶入れとくと溢ける

ことがないと云つて呉れたんで、おら大事にして居たに無いごんだ」

「御隠居様、あれは古田さんにお賣りなさつたんぢやありませんか」

祖母は意外に、口を尖らし、

「俺がかあ？」

と、呆れた。

「何して俺が其那事すべつちえ！」

「——困るなあ」

與次郎は伸子に當惑した笑顔を向けた。

「本當に御隠居様がお賣りになりました。古田の隠居が、こりやいゝ茶壺だと云つたら、東京さ持つ

て行くわけにも行くめからつて、譲つてやんなすつた。——五圓札とひきかへに私が届けたんだから、

間違ひございません」

「さうか——俺そげえに筆碌したべえか——俺ほんとに賣つた覺えなんぞ無えことよしか……………」

與次郎は自分が疑はれて居るのを知り、少し荒つぽく、

「ぢやあ、私が使ひに行つたんですから、五圓いたゞいて行つて取返して來ませう」

「……………さうさなあ……………」

與次郎が、有耶無耶に畑へかへると、後で、祖母は机のところまで伸子を追ひかけて來た。

「俺ら、ほんにやんだ（厭だ）ごんだ。——筆碌したにつけ込んで、何するか知れたこつてねえ。こ

ないださがした銅鍋だつて、俺が山本へ賣つたらうごんだよ」と訴へるのであつた。

「お祖母さま、筆碌は年の故で仕方ないんだから安心して筆碌しちまつた方がいいよ。筆碌なさり乍ら、時々いやにはつきりなさるから、却つて面倒なのよ」

「ふむ……。——だが、伸子お前何じよに考へる？ 本當に俺が賣つたべか」

伸子は、心が平らな時には、はははと思はず笑つて、

「私に判らう筈ないぢやあないの。念の爲それぢや先方へおきよなさいよ」

と云つた。自分の思ひだけで充分神経が充ふつて居る時、執念くく云ひ出されると、伸子は怒りつけるのであつた。

「お祖母さま、少しは空でも眺めてぼんやりして居る工夫をなさい」

伸子は六疊の隅に、古本箱を脚にし上に紫檀の机をかぶせて、卓子を拵へた。廊下の外は庭、その奥は畑であつた。障子について居る小障子をあげると、庭と畑とを區切つて居る低い草堤と勢よい梅の並木の一部分が眺められた。光線が斜に射す午後、その狭い並木、叢の風景は、荒廢した園の趣と初夏の緑の活々とした輝きとを相交へ美しかつた。

伸子の心持は陰鬱で敏感で、しんががらんと寂しかつた。先、佝を恨んだり自分を鞭打つたりして此處に居た時分は、心がむら／＼して居たから、周囲の自然など、さう深く自分に浸み透つては來なかつた。今の伸子の心は、病的に澄み沈潜して居た。田舎の天地を致々として推移させて行く自然の力と、自分と佝とを支配した生存の力とを結びつけ、身に泌みて感じた。自分といふ一人の女性の裡にある種々な欲望や本能。何でも彼でもばつと薔薇色に燃え立たせ陰影のさす餘裕さへ與へなかつた二十歳の情熱——情慾も其處では朗らかな力であつた。佝が卅五歳で、永い放浪の後疲勞と休安の欲望をもつて現はれた。その疲れた相貌さへ、愕いたり、身を蹴けたり、涙を流したり、何かに熱中したがつて居た伸子の若々しい生命への刺戟であつた。伸子は自分の情熱に陶酔しつゝあらひざらひの力で佝を我ものにした。伸子の生命の奥の情熱がそれで燃え盡き、二人の生活にほんのり温味を伴つ程度の煥になれば無事であつたらう。××教授並に細君——儉約や貯蓄や恩給が夫婦のたのしみで睦じく四十になり五十になり、墓穴まで行けたであらう。ところが伸子の情熱は佝一人に費ひ切れなかつた。彼女の生命は北海道の牛の乳で養はれた細胞と同じやうに豊富で、旺盛で、貪慾であつた。生活の上で彼女が求めるのは、夫である佝が求めるやうな、消耗することも吸収することも尠い「我等の安穩」が、生存の標語のやうな態度ではなかつた。彼女は、地面に墜る影法師でさへ二人寄れば

二つになるものを、男と女と二人よれば、二人寄つただけ多く、廣く、深く日々新たな人生を暮して行かぬ法はないと信じた。

源に溯ればつまり一つの執情が、愛と現はれ憎みと現はれる恐ろしい生き生きした心の潮。又、自分の本質に烈しく自由や獨立を愛して歇まない本能の在ること、そして其は、人との交渉に於て實に深くはまり込む、信じ易く受け入れ易い自分の性質に對して自然が興へた唯一の意味深い杖であることなど、伸子は、永く靜かに明けては暮れる田舎の一日一日の間に考へ知つて行つた。戀愛や結婚生活の明るく暗い種々雑多な情感を全心的に味はせてくれた人として、例へ結果は破壊に終つたとしても、側は自分にとつて決して行きずりの人ではなかつた。考へやうによつては、どんな女性でも一度は捕はれずには居まい結婚生活の夢想から、可成り完全に解放させて呉れた點でだけでも、感謝すべきなのかもしれない……

いろ／＼に往來する心持——側に對して伸子は割に和らいだ氣持であつた。共に苦しみ過した時を共に思ひ出し、それをともに弔ひたいやうな心持になる時さへあつた。最後に、せめて一本五の思ひ出の爲によい手紙を送りたい。伸子は或晩、追憶や感動に一杯になつて机に向つた。紙を展べ、ペンを執つた。が、最初の一字を書かうとして氣がつくと、何事であらう。いつの間にか感情の扉は

びたりと閉つてしまつて居る。何から書くのか、何を書いても、下らない、索漠とした空虚な言葉としか響かないやうに感じられた。側に對する小さな感謝、眞心からの訣れの言葉、文字に書くこと等は皆、嘘のやうな、故意とらしい感じを對手に與へさうな忙ればかり感じられた。逆に背で自分が側に向つて云つた數々の憎らしい言葉、毒々しい言葉が、次から次へ驚くべき現實性をもつて廻つて來た。共に報いて答へた彼の冷淡さうな皮肉、醜い自暴自棄の言葉が、その時の顔つき目つきと一緒この鼓膜に今聞くやうにまさ／＼響いて來る。——伸子は夜の燈の下で、恐怖をもつて言語の生きて居ることを感じた。人間によつて云はれた言葉は、きつと云はれた丈には生きる。憤りにまかせ、怒みにまかせ、互の云ひ合つた言葉が、今は互を裂く威力をあらはして居るではないか？

——伸子は一字も書き得なかつた書簡箋を、思ひ沈み乍ら丁寧に細かく引き裂いた。彼女は椅子をすらせ、紙屑籠の眞上から、ばら／＼ばら／＼とその白い紙片をすて、庭へ出た。大きい月の園りに更に大きい暈がかゝつて、芝は濕つぽい夜の匂ひを漂はせて居た。遠くの隅の黒く見える遺松の傍から、湯を貰つて歸る婆さんの姿が現れた。

「え、月だなし」
「……………」

「——おやすみなんしよ」

「おやすみなんしよ」

伸子が無愛想にして居ると、横を通りすがり乍ら、古い睡象のやうなその婆さんは、わざとらしく
隙を細め、

「え、誰があることよしか、遠くはなれて會ひたい時は、月が鏡になればよい。」

彼女は、濡れた手拭を丸めて持った手で、伸子にちよつかいを出すやうな莫迦げた形恰をした。

七

伸子の樂しみは、素子からの手紙であつた。田舎へ立つ前、伸子の必要から、一緒に鎌倉へ行つた。
活動寫眞を見て置く要があつた。それも素子がつきあつた。共に暮して居るのが祖母では、鍋釜の話
ししか出來ず、さうでない話對手のやうに往復して居た手紙が、伸子にとつて段々生活上必要なもの

となつて來た。時々胸一杯になる種々な感情や考へを、佃とこのことにつき、又他のことにつき伸子は
前後かまはず、大きい紙や小さい紙に書きつけて素子に送つた。素子からは、又々其について彼女
の意見を云つてよこした。素子は、始め伸子が感じたやうに感情家ではあるが、底に落付きといふか、
世の中を知つて居るといふか、實際的な一種の均衡を保つて居る女性であつた。伸子が性急に感動し
たり、思索したりするのを、彼女は好意と滑稽とを感じつゝ、愛のある皮肉で應答してよこした。
「あなたなんか、全く世間知らずなんだと思ふ。今日の手紙だつて。あの傳で佃氏についても夢想し
たのだと思ひました。私に感心なんかするのは馬鹿ですよ。散々買ひかぶられた揚句、どかんと幻滅
したりされるのは誰しも御免です」
又、

「私も馬鹿だが、あなたも馬鹿ですね。而も變な手のこんだ馬鹿だ。自分の馬鹿さをいやに堂々と云
ひ現す腕がある」

全くさうだと思ひ、繰返し／＼素子の手紙を読み、伸子は愉快に笑つた。その日の氣分によつて、
素子は細かい粒の揃つた丸つこい字を丹念に書くかと思ふと、駄々子のやうに、手紙の末に行く程大
きな字を亂暴に書きなぐつてよこすこともある。表面大層心得たらしくあるが、彼女のしんは情に脆

い、切な、正直者であることなど、伸子は愛をもつて洞察する。——素子に會へた偶然を、伸子は眞心で悦ぶやうになつた。伸子の、がらんと空虚に銷沈しがちな心に生氣をふき込むのは、素子との新たな結びつきであつた。

或夕、伸子は椽側に祖母と居た。祖母は長椅子に横はり、伸子は踏臺を持ち出してその傍に腰かけた。彼等は、晝過最近雇つた女中の給料について喧嘩して、仲なほりしたところであつた。晝飯がすんだ時、女中が急に入用が出来たから給金を欲しいと頼んだ。其日は二十五日であつた。十五圓といふ世話人への約束で雇つたのに、祖母は、さうは云つたが人数も勘いだから女中には十三圓の割でやると、急にけちなことを考へつた。伸子が其はよくないと云ひ、他愛なく腹を立てた。却つて後睦しく、祖母は珍しくのび／＼昔の話など伸子に聞かせた。古いこと、高山といふ家に婆さんが居た。祖父が、参事司補になつたといふのを耳が遠くきゝ違へ、「三里四方といふお役かのし」と訝しげに訊いた。訊かれたこちらの隠居も亦驛なので、眞面目くさつて、「さやうであります」と返事して居たといふ話など、七十九の祖母は自分よりもつと年上で、響けた二人のばあ様問答を可笑しがり興にのつて「さやうであります」と兵卒のやうな口調を眞似て伸子を笑はせた。夕飯に呼び、乍ら女中が二通手紙を伸子に渡した。下の一つが、日本封筒で、素子がいつも使ふのにそつくりであつた。然

し、朝一つ受取つたので、彼女からと思へず、怪しみ、裏をかへして見た。ヶ張り素子から來たのであつた。今朝のと同じ日の、夕方の日附であつた。

「廿八日に私の仕事が多分一段落つくのです。暫く暇になると思つたら、急に其方へ行つて見たくありません。邪魔ではいけないから、悪かつたら遠慮なく、直ぐ返事を下さい。行つてよい都合なら大抵廿八日の一時に立ちます」

伸子は、歩き／＼讀んで居たが、思ひがけぬ嬉しさで胸が苦しいやうになつた。上氣せ、直に、いらつしやいと電報を打たうかと思つたが、兎も角も自分を落付け、食卓についた。亢奮しつゝ彼女は祖母に告げた。

「ね、お祖母さま、素敵よ、廿八日に吉見さんが來るんですつて」

「ふうん。——何も食ひ物がなくて困るなあ」

「其なことかまひやなくてよ。不便なのは解つて居るんだから」

陽氣に箸を取つたが、ふつと伸子は嘔み込んだ飯が喉で塞へる程情がせき上げて來るのを感じた。今自分をこれ程捕へる喜びのつよさにつれ、五年の間自分が如何那に嬉しさいふものに飢え暮して來たか、哀れに恐ろしい程はつきり思ひ廻らされて來たのであつた。友達でさへ、これ丈あたゝかい

悦びは齎して呉れる。何故何かが、たつた一度でも、何かで思ひ出すのも嬉しく誇らしい悦びを自分に與へてくれることが出来なかつたらう。尤もこの田舎の家へ彼が来ることは、動坂に拒まれて居た。けれども、彼に若し心さへあれば、五年のうちの何かの機会、何かの場所に、さゝやかな然し忘れぬ喜びを結びつけて呉れられたらう。悦ばせ易い、そして悦びたがつてがつ／＼して居るやうな自分を——全く考へると卑ろ不思議といふ位なものであつた。しんから嬉しかつたこと、何の暖い心を身にひきそへて覺えたことは何か無いか。まさか一つも無い筈はあるまい。皆無といふのは恐ろしい過ぎ、伸子は記憶の中を遡り掻きさがした。思ひ出すのは、自分の眞心を信じさせようと熱心に自分を説きつけて居る自分、絶望を負けん氣で覆ひ紛らさうと力んで居る自分、さもなくば、暗い焔のやうな男と女とのことなどばかりであつた。記憶にのこつて居る程の場面々々は、どれも頬を流れた涙、やけつくやうな胸の中を流れた涙の苦々しさを伴つて浮んだ。その癖いつも生活の主になつて動き求め腕いて居たのは自分だ。——

机に戻り、素子へ返事の手紙を書き、出させ、猶それらのこと／＼を思ひつゞけると、伸子は顔へるやうな悲しみを覺えた。何と生活出来ないと決心してから、伸子は、自分の精神と肉體とで得た経験を徒にしまいと確く覺悟して居た。たゞの不幸や失敗には終らせまい覺悟であつた。何かを、そ

の上から生れさせよう！ 其故どちらかと云へば理性的に心が働いて、時代や性の問題を背景とし自分が生活し經て來た道を通觀したり解剖したりしようとする傾きであつた。然し、素子のこだはりない心からあふれた温さで伸子の感情はその堰を切つた。彼女は、二十から二十五までの、若い、どんな情熱でもどんな歡喜でも純に火のやうに受けられた時代を空しく貧弱に過して仕舞つたこと、そして、それらの年は一生に再び還つて來ないことを痛感したのであつた。生活を惜しむ心が髪の毛の端にまで満ちた。何と自分との不甲斐なさを心の中で罵り乍ら、伸子は永い間靜に聲のない歎息をつゞけた。泣き乍ら、泣くことによつていくらかづゝその苦しみを和げられ乍ら、伸子は考へた。世の中に自分のやうな心を持つ女は一人しかないのであらうか。自分の得たいと願ふ生活の歡びは、此世に在つていけない程贅澤極つたものであつたのであらうか。——神よ、神よ。そして、自分は誰からも愛して貰へない程、度はづれた女なのであらうかと。

八

素子が来る日、伸子は待ちかねて停車場へ迎に出た。午後からひどい雷雨があつた。家を出る時は小歇みであつたが、市から歸る頃丁度又烈しくでもなつて、俵が出なければ、伸子は市で泊るしかあつたと思ひ、小さい櫛など持つて出た。去年の夏、村の俵夫の家へ雷が落ちた。彼は其時喫驚した餘り病氣した。其から雷雨がひどいと、その俵夫は足がすくんで動けないのだ。市からはさういふ天候だと、村まで有名な風當りの強い街道を冒して來る俵夫などは一人もなかつた。歸途には幸風だけになつた。眞暗な夜道の八方を吹き廻す風の荒々しい、唸りだけ聞える。素子が幾分不安さうに前の俵の中から、

「——ひどいな——餘つぽどあるんですか、まだ」といふ聲がした。

「もうあと三分の一」
悠くり力を入れ大きい聲で明晰に返事したのに、風にふき散され素子へ届かなかつた。「え？」とき返す聲がしたが、伸子はもう黙つて揺られて居た。

翠朝、東椽の雨戸をあけると、素子は、

「ほう！ 此那い、景色のところだつたんですか」と、驚き々新にした。

「二度喫驚ね、昨夜、實は如何那ところへ來たことかと少し僻易して居ただけけれど」
電光と雨に洗はれた後の消い潤やかな北國の空、遠くの魅力ある連峰、左手に展望される丘陵の上の可愛い森、活々とした美が伸子をも見惚れさせた。

「空氣が何だか違ふでせう？ 随分爽かで勁いやうでせう」
「F縣に此那ところがあるとは思はなかつた！」

「——私關西——京都位までしか知らないけれど、あの邊の景色より此方の方がよつぽど好きよ。あなたは何？」

「あつちは平凡ですよ——平凡な美しさだ」

祖母が出て來、頻りに、
「よく来て下すつたない、田舎で何のおもてなしも出来なくて耻しいごんだ」と繰返した。伸子は、

「八十になつてもまだあゝいふ技巧は忘れないのね」と素子に囁き、大笑ひした。

黒つばい紺地に緑や茶で古風な粗い格子縞のある膝掛が一枚、戸棚にあつた。伸子は其を庭の芝生に擴げた。二人その上に腹這ひにころがつた。素子が膝掛の房の間から出て居る草を抜き、自分の細いパイプの先にさし、吹矢のやうな遊びを發明した。

「どれ、かして御覽なさい。私なんか、もつともつと飛ばせるわ」
草は軽すぎて却つて遠くに飛ばなかつた。

「あゝ、變にして居たんで肩が痛くなつた」

やがて素子は仰向きになり、兩手を組合せて額にかざし乍ら、凝つと地平線を眺めた。香ばしい草や日の匂ひが四邊に漂つて居る……平和な楽しい信頼に満ちた感情が伸子の胸にあつた。彼女は先達鎌倉へ行つたとき、ホテルの傍の砂の小高いところに二人矢張りこゝやうにして目を浴びて居た氣持

を思ひ出した。彼女は素子の傍に居ると、據りどころのあるやうな居心地よさ、落付き、悪い意味の女らしさから來る窮屈を脱したいと心持するのであつた。これは伸子に全然新しい感情であつた。死んだ祖父が使つた遠目鏡を出してかけ、彼女は雲を覗いたり、山を覗いたりした。青々とした美しい山肌が其遠目鏡で見ると、樹木が疎で野猪の皮膚のやうであつた。——喋り出す。眞面目な話。香氣な話、思ひ出の話、種はつきず、伸子は素子のこれ迄の生活について偽りのない話を聞いた。楯崎から二人で送つた寄書の返事のハガキが來た。其に、

「今頃きつと吉見さんは其方だらうと思つて居ました。どうです、私の天眼通は偉いものでせう」とある。二人で讀み、笑つた。素子は三日居て歸京した。

素子が立つ前に横はつて居た長椅子がそのまゝ、羽根蒲團をのせて部屋の隅に在る。夜、境の唐紙をあげ放し、机のある方の部屋は明るく次の間は暗い間をぶら／＼行きつ戻りつし乍ら、伸子はいつの間にか再び自分を貫いて、活潑な生活慾が流れだして居るのを感じた。自覺しないうちに全身がその流れに領せられたかのやうであつた。一週間前、素子が來るといふ通知を受取つた晩自分を眠らせなかつた殆ど肉體的な痛みのやうな悲しさ、却つて生活慾の自覺を知らず前兆であつたかの觀があつた。新しい生活をしたい、違つた暮しを見出したい、さう思ひつめ求めて居た時、其等のものは

何處にあるかさへ知れなかつた。知らないうちに、時期が来た。或朝不圖目を醒し、人が俄に泌み泌みと天地の春を感じるやうに、氣がついて見廻すと、もういつか自分の圍りを流れて居るのは過去の潮ではない。——さう云ふ氣持が深く伸子を動かした。

翌日、伸子は確りと更に一段覺悟の定つた心持で、俚に手紙を書き出した。情誼ある手紙を書きたと思ふと、和らいだ氣分はいつぞやの夜の通り、すらりと溢り出さず、變に驟然とした丁寧な言葉の文が出来た。氣に入らず幾度も破き、諦めて遂に彼女は簡單に要點だけ書くことにした。今度田舎へ来たのは此をけじめとして互に別の生活に入り度い爲であること、東京に居て其を實行することも、彼に云ふことも出来なかつた弱さを許して欲しいこと。

「此事は最初から私にだけ必要で、貴方にはちつとも必要の認められなかつたことです。恐らく今でも其はさうだらうと思ひます。けれどもどうぞ今度はおきゝ入れ下さい。そしてどうか互に憎み合はずにすむ關係になりたいと心から願ひます」

彼女は、書き終つてからも暫く二枚の書簡箋を眺めて居た。感動して居るのか、平氣なのか自分ではつきりしない心の状態であつた。伸子は念を入れて其を揃へ、墨み、封筒に入れ、自分で持つてポストへ入れに出かけた。

歸途上を仰ぎ見ると、空一杯夕焼であつた。笹妻が彩り多く天の高みに浮いて居た。稻妻が時々閃く。桑畑も杉の防風林も、はては遠い山脈まで耀きに恍惚溶け込んで居た。空氣は透明でそよよとしない。體も心も自然にまかせて空を仰いで居ると、あゝ、やつとこれで重荷が下りたといふ心持が犇々と迫り、伸子は、四邊の静けさ、廣さ、美しさと遠くに居る素子とを一緒に擁きしめ共によろこんで欲しいやうに感じた。東京へ行きたい。……彼女が歩き出した。東京へ行きたい……。行きたい。行きたい。テムボが次第に速くなり、伸子は段々矢も柁も堪らなくなつて来た。素子が歸る時、伸子は成らうことなら一緒に行きたい位であつた。彼女は其を、俚に對して自分がちやんと立場も明にして居ないのを考へて堪へた。今、兎に角一段落ついた。東京へ二三日行つても一ヶ月の忍耐が無駄に成ることはあるまい。——伸子は、素子が今忙しい時ではないかと、目を繰つて見た。東京へ行くとしても、彼女は人の出入の多い、いつ佃の來るかもしれないぬ動坂へ行くのは厭であつた。彼女は、素子の處へ行く積りであつた。そして、誰にも會はず、都會の賑やかさと素子の皮肉な然し快い鼓舞だけを吸ひ込んで來よう。

伸子は勢づいて歩いたが、急に、自分が一枚も單衣を持つて來て居ないことに思ひ當つた。拾で六月、東京は歩けない。妙案が浮んだ。彼女はいそいで家へ戻り、箆筒から藍縞の袴を出し、畑の向ふ

に住んで居る、月が鏡になればよいといふ俗謡をうたつて聞かせた婆さんのところへ持つて行つた。彼女はせき込んで頼んだ。

「これの裏をみんなはがして、裾と襟をくけて頂戴、明日の朝までに。——單衣にするんだから」
其は染なほしで、裏は白く、滑稽なのだが、伸子は羽織を着るから平氣と思つた。

九

動坂の家へ知らせない積りが、東京へ来る汽車中、思ひがけない人に會つた爲變更した。素子の家の近所の自動電話で、伸子は母を呼び出した。昨夕東京に歸つたと告げると、

「へえ……」

と、母は疑はしいやうな不快に亢奮の籠つた聲を出した。

「妙なことがあるよ——佃は赤坂に居ないよ」

それは如何いふ意味なのか伸子には判断がつかかなかつた。

「私赤坂に行かないから知らないわ」

「何處に居るんです？」

「吉見さんのところ」

「——兎に角佃は赤坂に居ないよ」

多計代は、脅かすやうに又其を繰返した。

「Kからお前がいつ歸るかつて電報を打つてよこしたよ」

持つて廻り、意味ありげな口ぶりだったので、伸子は直接法に要點にふれた。

「——汽車の中でジョンストンさんに會つたら、是非お會ひしたいから明日動坂へ上りますつて。私も行くから、其時いろ／＼伺ふわ」

母は考へて居たが、きつぱり、

「今直ぐおいで」

と云つた。双方の電話口で暫く無言がつゞいた。伸子は、ちやあ行きますと云つて電話を切つた。

タクシーに揺られ乍ら、伸子は、では佃がKへ行つたのか、と考へた。手紙を見て、昨日、彼は前

日伸子が立つた後へ行つたのだらう。勿論伸子は、あの手紙だけで萬事解決するとは思つて居なかつた。佞が文面を二三度繰返して讀み、伸子が本氣なのを知り、立つ決心をした時の心持が彼女によく察せられた。彼は七分の不安と三分の自信をもつて出かけた。何故なら、伸子が別になりたいと云ひ出したのはもう二年も昔のことであつた。彼女は鎌倉に暫く家をもつて暮したり迄したが、結局彼の涙や當座の熱に負けて來た。今度は少し頑固であらうが、此方も其だけ強硬に根氣づよくとりかゝればよい。さういふ、佞の夫としての習慣的な態度が明らかに見え、伸子はうんざりし腹立たしく、彼に對して抱いて居た或程度までの公平さ迄失ふやうな氣がした。今迄の自分とはもう違ふのだといふ冷やかな反抗的な心持さへ頭を擡げた。

父と母が、難しい顔をして坐つて居る。中へ伸子は入つて行つた。行くのを拒んであるKへ佞が無斷で出かけた。伸子は何時歸るといふ譯の分らない電報が來たのに、當人の居處は判らない。種々たゞ／＼曇り、而も底に何事が伏在して居るのか豫測がつかないところから、両親は居心地わるい迷惑さで、ひどく不機嫌なのであつた。其感情は伸子に理解出来るのだが、何だか佞の側に立ち、自分とつちめたり、あやまらせたりしたいやうな彼等の心持が伸子を傷つけた。夫婦間のごたくが夫婦の間だけに止らず周圍に波及し、厭はしい心の陰翳を共に連れて見せ合はなければならぬ。自分の

責と思つたが、伸子は、夫を愛してもいけないと云ひ、嫌つてもいけないと云ふらしい親心の微妙な作用を皮肉に情なく感じた。

佞に送つた手紙のことを話すと、親達は沈黙した。やがて多計代が、

「——一生の大事だから、熟考した上でないといけないね。——お前がそんな感情家で、一生孤獨な生活が出来るとは思はれないし」と、始めてしんみり云つた。

「それは自分も知つて居るの。——考へるだけはまだ一年も二年も、もつと永く考へて居たわ。でもね、私はもう理屈ぬきにやり切れなくなつて居るの。魚が水のない場所に生きてゐられない——それを、魚がわるいつていふ人はないでせう?——人間も同じ場合があると思ふわ」

「いづれ、明日でも會ふだらうが、よく考へた方がいゝね——結局、まあ、その方がいゝことになるかもしれないが……」

本當に勇氣のある人は溫和だ、自分にも、どうかその溫和の百分の一を授け、佞と最後の會見をした。伸子はさう思ひ乍ら床についた。

翌朝早く佞から電話で、伸子は起された。

「赤坂からお電話」

といふ聲をきくと、喉がまだ開き切らない先、いやな心持が胸を掠めるのを感じた。氣持を整へる餘裕を得る爲、着物をなほし、板の間へ出て行つた。

「もし〜」

いきなり、

「もし〜、いつ歸りますか？」

と、急性な、喉の乾きついたやうな側の聲が鼓膜を刺戟した。

「——今日ジョンソンさんがいらつしやるの、お茶に。——それがすんでから——」

「いそがしいんですか」

「——……」

「そんなにいそがしいなら、いつでも好きな時に歸つていらつしやる」

ガチャンと受話機をかけた音がした。

伸子は眠りなほしも出来ず、其まゝ起きた。一時間も経たないうち、又、赤坂から電話が来た。

「もし〜伸子さんですか」

今度は側でなく、側の親しい友人の織田の低い平らかな聲であつた。何と云つてよいか判らず黙つて居た。

「何時頃歸りますか」

「多分八時頃になるでせうと思ふけれど——貴方——そこにゐらつしやるの？」

「えゝ、昨夜泊つたんです——ではどうぞ」

尻切蜻蛉にぼつんと電話が切れた。側と織田と二人の男が、「ぢや今度俺が掛けて来てやらう」などと落付かず立つて話して居る部屋の光景を想ふと異様に物々しかつた。伸子は、愧しく思つた。

十

赤坂へ行つたのは九時過であつた。表の角から、人つ子一人通らない早寝の暗い横通りを歩いて行くと、竹垣の透間から側の部屋の灯

が煌々と往來まで洩れて居た。單衣の肩が薄寒いやうに感じつゝ其を眺め、伸子は暗い格子をあけた。佝が、弦の切れたやうな勢でとび出して來た。

「伸子？」

「——たゞいま」

彼は、伸子が下駄をぬぐのを待ち切れないやうに兩手を執り、ぐん／＼つき當りの燈火のない部屋へ彼女をつれ込んだ。伸子は、暗闇で間誤付き、椅子につき當り、其につかまつた。佝は猶手をはなさず、片腕に彼女を抱へるやうにし乍ら一つの椅子をすらし其にかけると、狂氣のやうな力で彼女を抱き締めた。彼は、

「Do you still love me ?」

と云ふなり、子供のやうに聲を擧げて泣き出した。彼は泣き乍ら伸子の頬に自分の頬をすりつけた。手を撫で、肩を撫で、髪を撫で、顔へる大きい掌で押し潰すやうに彼女の體ぢゆうを撫で廻した。——伸子は、凝つと動かす、なすがまゝにされた。彼の重い頭が、彼女の胸の上につしり靠れかゝつて居た。止途ない涙が生暖く着物を滲み通すのを感じ乍ら、伸子は彼の頭を抱き、靜かに悲しみを以てその髪を撫でた。眼が闇に馴染れ、嗚咽する毎に夫の肩が波打つのが暗い裡に見えた。茫然と其を見

据え、伸子は自分に駭き、ぞつとし乍ら心で嘸いた。

「——あゝ私は泣いて居ない……泣いて居ない……泣いて居ない……泣いて居ない……」

夫と共にわつと泣き出さない自分に駭き恐れつゝ、伸子は夢中で彼の頭を撫でた。彼女も、俄に惡寒と嘔氣を感じ身震ひが出た程、切なく、苦しく悲しいのであつた。けれども、どうしても涙は出ない。二人がこのやうに苦しまねばならないこと、而も死んだ愛は再び甦らず、これら總てさへもう直ぐ嘗てあつたことに歸さうとして居るといふ絶望的な意識、其等は伸子に呼吸の止るやうな苦惱を與へるのであつた。

「あゝ……」

伸子は一層深く胸に近く佝の頭を抱きよせ、彼の髪の上に自分の頬を休ませた。

「——私の愛した人！ あのやうに可愛く、いとしくあつた人——互の間にどれ程涙が流されたことであらう！……」

一言も口が利けず、涙も出ず、其爲胸が切なさで硬直し伸子は氣を失ひさうになつた。彼女は眼を瞑り躊躇した。佝は周章で、彼女を支へ、横たはらせた。

佝は官能の嵐で、伸子の心を引き攪ひ、又自分の中へ取り戻さうとするやうであつた。伸子は始め

拒絶した。が、終りに、烈しく泣きつゝ自分から荒々しい悲しみで彼の抱擁の下に身を投げた。彼女は自らを傷める底知れぬ苦さと、動亂する官能の火花との間を漂ひ乍ら、最後といふ字が、大きく大きく物を云ひさうに、自分達悲しき男女の體の上に書かれて居るのを知つた。

翌日、何は勤めに出なかつた。

「私は、Kへ出かける時、來週迄缺勤届を出して置いたのです。三日かかつたら、どつちかに決まると思つたから」

伸子は、夫が今度は全力的なを感じた。全力を出したら彼女を思ひ返させ得るといふ確信の下に。それは、一種の監禁であつた。その日は曇つて蒸暑かつたが、障子を閉め切り、狭い本箱の前の疊の上に膝をつき合はせて、一日中對座した。食事の時だけ立つた。その食事も、伸子は止むなく坐らされ、よく一人で考へて居た隅で所詮は一つの返答を捏ね廻して居る間に、何が自分で用意するのであつた。食へ終る。又彼は或は優しく、或は可恐く切り出すのであつた。

「此那に頼んでも思ひ返して呉れないんですか。——私にだつて缺點はあつたのだらうから、きつと此からなほすと云つて居るのに。其でも君は一緒に生活しないといふのか」

伸子は、元氣なく彼を見上げ、訊いた。

「——缺點をなほすからつて——ぢやあ貴方は何處が悪かつたの？」

「其那こと分るもんですか！」

彼は決然肩を聳すやうにして答へるのであつた。

「私は自分が悪かつたとは思はない。然し君がさういふから其那こともあるなら、なほさうと云ふのぢやないか」

伸子は、溜息をつき、云つた。

「だからね、もう水掛論のやうなことはやめにしませう、ね。悪いと云へば二人がわるいのよ、喧嘩兩成敗よ。——たゞ、せめて少し物の分る人間らしく、もつと傷け合ふこと丈はやめたいわ。」

暫く黙つて居た後、何は考へ深さうに云つた。

「仕事をする女でも、楢崎さんなんか、あゝやつて立派にして居る——君だつてさう出来るんぢやないかなあ。それに、織田とも云つたんだが、さういふ苦しみは皆我々が十五年前に通つて來たものだ」
伸子は、苦笑で唇を歪めた。

「——貴方は楢崎氏？——第一、どうして貴方は私が何でも仕事々々といふだけで生きて居られるとお思ひになるのかしら。まるで變だわ——私はへぼ小説を書くより前、女に生れて來て居るのよ、而

もまるで女なのに……」

「それならば、さ」

彼は伸子の手の甲を、子供を騙すやうに撫でつゝ説教するやうに云つた。

「どうして、此那に愛して居る私のところから去らうとするの？ え？ 私はもうどうせ永く生きる

體ではない。せめて死ぬまで私の傍に居るだけでよい、居て下さい、ね？」

涙をためた眼で伸子を見守つて居たが、彼女が黙つて居ると、何は、毒々しい顔付になつた。そして、強迫するやうに云つた。

「私はKで皆あなたの日記を讀んで來ました」

——留守の机の廻りを、彼が動揺する感情でせはしく彼方此方かき探したとらう。何かこの當のな
い搔き立てられた不安に結びつける憎みの石、氣休めの石、何かは見つかると焦立つた彼の心
が感じられた。日記を、彼女は机の上に出しつ放して來た。それには素子に對し傾倒した自分の感情
などが細かく書いてあるのであつた。

「……………」

何は業を煮やし、もう一つの彈丸を放つた。

「——戸棚をあけたら、ごたくの中から、君が動坂へやつた手紙が出た、那須から。——彼那手紙
を書く人とは思はなかつた。實に意外だつた」

暑さ、苦しさ。伸子は頭がぼつと成るやうだつた。再び夜が來た。彼は死なうとする蛾のやうに又
伸子の上に兩腕を擁しようとした。

「あゝ、どうするのよ！ どうしようといふのよ、私を！」

おい／＼泣き出し、止らず、泣きじやくり乍ら伸子は氣を失つた。

同じやうな恐ろしい二日目、伸子の神経はすっかり疲勞し始めた。夕方になつて、彼女はおがむや
うに何に云つた。

「ね、氣が變になる迄お互に疲らしたつて同じことよ。——いざといふ手おくれになつて此那に方
なさるなら、何故もつとすゝつと前に、私の本氣を認めて下さらなかつたのでせう。どんなに苦し
がつたつて離れられないさ、と高くくつて居らして……」

「女はどうか知らないが一旦結婚して男は逆も一人で居られるもんぢやありませんよ——肉體的な意
味でなしに——」

「——それはさうでせう。——……でも貴方に本當に入用なのは細君である一人の女なのよ、私

が細君だから離せないやうに思ふだけなのよ。強ち伸子に跟つたことではないのよ。伸子だから、といふのでは決してないわ……」

「噛みつくやうに伸子を睨まへ、佃は、

「ぢや、どうしてもいやだといふんですね」と念を押した。伸子は、こつくりと合點した。

「どうしても？」

「——ええ。——どうしても……」

「それでいゝ！ その返事が聞きたかつたのだ！」

「猛々しく彼は立ち上つた。そして、机の上から紙とペンをとつて來た。

「さあ、すつかり定つたから荷物の覺え書を作りませう」

「白い書簡箋の中央に横線をひき、上にT、下にNと頭字を書いた。

「それではと、——机——いでせう？ 椅子は僕も氣の毒だが三脚だけ貰つて置きます。それから

筆筒と」

佃は眞蒼であつた。頬がけつそりこけて見えた。ペンを持つ人指し指に氣味悪い程力を入れ、書くのを、伸子は放心したやうに見守つた。荷物を分ける………荷物を引とる………心が破れたのに荷

物がのこる………何と醜いやな引き次ぎであらう。伸子は淺間しく、この瞬間其等家具類がどきに消えて無くなればよい、耻知らず！ と思つた。

「ね、書かないだつてよくつてよ、私何にもいらぬわ。——本と焼物だけあれば……」

佃はからりとペンを投げすて、

「あゝ、親父が知つたら、さぞ……」

と頭を掻き掻り泣き始めた。伸子には少し其が芝居じみて感じられた。親の力が何かの役に立つ自分等の間であらうか——其にも拘らず彼女の瞳から冷たい涙が溢れ、するする頬を傳つて膝の上に滴り落ちた。

佃は、よろめくやうに歩いて、納戸から針金切の鋏をもつて來た。そして、椽側に出、隅に作りつけてあつた小鳥籠の前に蹲んだ。紅雀や十姉妹が彼の姿に向つて羽搏いた。凝つと眺めて居たが、

「あゝもう此那ものにも用はない！」

と呟きつゝ、鋏で網を剪り始めた。バリ、バリ、片端から網がめくれ上るのが、伸子の坐つて居るところから見えた。小鳥共は、俄な變動に驚き、片隅により集り、悲しげに騒ぎ立てた。大きい穴が出來ると、佃は、はた／＼網の後を叩いた。磔のやうについと一羽の十姉妹が破れ目から庭へ飛

び去つた。次いで紅雀、残つた十姉妹。或者はすぐ椽側の下の沈丁花のこんもりした枝に止つた。或者は、もつと遠い梅の梢まで翔び、急に放たれた空気の廣さと自由さを信じ得ないやうにチツチツと啼いた。すると、何を思つたのか、一羽の十姉妹が、椽側までふつと戻つて來た。頭を傾け、傾け、破られた網の口を見て居たが、ちよいと跳んで又元の籠に入つてしまつた。何も伸子も、鳥の動作にいつか氣を奪はれ眺めて居たが、彼は意外に十姉妹の戻つたのを見ると、いきなり、碎けさうに伸子の手を掴んだ。

「あゝ、あゝ、鳥でさへ歸つて來るのに——………君は………君は………」
 苦々しい心が湧き、伸子は目を逸した。飼鳥になつては堪らない。さういふ心持がした。伸子の視線の行手に夕方の空が見えた。都會の卵色の濁つた夕空の前に庭の松が黒く見えた。非常に鮮やかにくつきり、松葉の一本一本が黒く見えた。

(終)



昭和三年三月一日印刷
 昭和三年三月三日發行

發兌

東京市芝區愛宕下町
 四丁目六番地

改造社
 電話芝(43)
 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
 電話芝(43)

伸子

定價貳圓五拾錢

著者 中條百合子
 發行者 山本美
 印刷者 植田庄助
 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
 東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

終



改造社版

